

---

# SKY-JOE story

hms

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S K Y - J O E   s t o r y

### 【Nコード】

N 6 5 8 7 W

### 【作者名】

h m s

### 【あらすじ】

国という概念がないもう一つの地球！

画期的CPU”レジラス”の開発によって世界の頂点に君臨した“コ・モンランム”

を筆頭に巨大企業が世界を構成していた。企業間での絶えることのない戦火のなか超高性能ジェット戦闘ヘリ“マッドサンダー”を操りスカイ・ジヨは一人の男を探していた。

一方“コ・モンランム”で極秘裏に進められていたサテライト計画

の被験者達は己のアビリティを駆使し逃亡を企てる。

## プロローグ(前書き)

超高性能ジェット戦闘ヘリ“マッドサンダー”を操る。スカイ・ジ  
ヨの物語!!

## プロローグ

広大な宇宙空間のなか その星は、  
地球と同じ質量、大気、自転数で  
我々の遺伝子と寸分かわらぬ人類が、高度な文明を営んでいた。  
同じ時間軸上に存在するか否かは不明である。

彼ら人類には、“国家”という概念が存在せず、“国家”の代わりに企業が世界を統率していた。  
人々は各々に利益をもたらしてくれる企業に属し、自由に雇用先を替えることが出来た。  
企業に所属できない者は 企業の本社支社などの”シティ”の周辺にスラムを作り  
低レベルの”ソルジャー（傭兵）”の仕事に参加できる順番を待っていた。

産業が発達し企業の発足当時から  
企業間の戦火が絶えることなく  
歴史は人々の血によって築きあげられてきた。

この星の暦 AD2051年  
先進をいくIT企業”コ・モンラム”が  
画期的CPU”REGIUS”<sup>レジウス</sup>を開発  
これを期に世界は大きくゆれ戦況はさらに拡大し  
各企業に、莫大な被害（損害）と、莫大な利益（生産）を与えた。  
戦火の拡大により、商品の消費率が上がり需要が爆発的に高騰して

いったのであった。

CPU” REGIUS” 自体は日々進化し、生活産業、軍事、開発、

．．．．．  
それぞれの分野でとても欠かせない物となり

” コ・モンランム” は爆発的な成長を遂げ

幾つもの企業が” コ・モンランム” に吸収もしくは占領され

” コ・モンランム” は世界の頂点に君臨した。

そしてAD2098年 ．．．．．

## Chapter 1 未来錯誤 01 ジョー・クレンナ

### 01 ジョークレンナ

惑星一の大陸“ネポアル”

そのほぼ中心に”コ・モンランム”の本社は巨大な都市を形成していた。

5000m級の独立峯“キールマムジュール山”山頂から軌道エレベーターが衛星軌道上まで伸びており

その山肌に沿って建てられた超巨大な建造物を中心に放射線状に広がる都市の直径は160kmに及んでいた。

軌道エレベーターが巨大な都市の勇姿に花を添えていることから宇宙開発の産業も積極的に行われていることが伺える。

”首都レジアス(王)シティ”コ・モンランム最大のヒット商品と同じ名前である。

軌道エレベーターのある中心から35km80Km地点に環状鉄道と環状高速道路が走っており

東西南北さらにその中間8箇所、計16か所に

都市内輪、外郭警備を担う、モンランム軍の巨大ベースが点在していることから。

別名”鉄壁レジアス”とも呼ばれている。

各ベースには陸空軍が常駐されており、内輪のベースは都市の防衛警備、

外郭のベースは都市の防衛、軍事戦略の拠点になっている。。

都市の東方外郭に位置する”ヘリオス・ベース”

都市の中心部では、雨が降っているもようだが

この基地の周辺は青空に囲まれていた。

陸軍所属の歩兵部隊を輸送するヘリが、15台の対地用装備を施した戦闘ヘリを護衛にともないヘリオスベースより飛び立っていく大型ローターを上部に2機かまえた輸送ヘリは、そのおおきな陰を地表に落とし速度を上げていった。その下の砂漠に延びるレジアス放射状3号線へつながる道をその下一台の大型トレーラーが走っていた。大型トレーラーはヘリオスベースの手前でいったん停車すると、入門の審査をクリアして基地の中に入っていた。

運転席の後ろにキャンピンググルームを兼ね備え荷台に巨大なカーゴルームを施した全長25mのトレーラーを運転しているのは10代半ばの栗色の長い髪の美しい少女であった。

少し小柄な彼女がツナギ姿でこの大きなトレーラーを運転しているのはとても不思議な光景であった。

「お父さん、パスしたわよ、もうすぐセンターにつくから」と、キャンピンググルームに向かって話しかけた。

奥からは、・・・返事がない、毎度のことのようにだ。

少女は返事の催促をしたりはしなかった。

ルーム内で、お父さんと呼ばれた男が、TV電話で誰かと会話をしていた。

「いや、もつたいないもつたいない、

何度も言うようだがね。君ほどの男とそのマシンがあれば、

モンランム軍専属料をはるかにしのぐ報酬をどこでも払ってくれるんだ。

いや、もつたいない、そうは思わんか？、ジョー？」

“ジョー” 栗色の長い髪の美しい少女がお父さんと呼んだ男の名前だ。



「こちらは何度も言ってる。金には不自由してないよ  
よしみで話は聞いているがオズ、お前でなければ、・・・」

「そうそう、この敏腕プロモーターの俺でなければこんな話もつ  
てこれないって」

TV画面の面長で両の目が少し釣りあがった男、

オズがジョーの言葉に割り込んだ

「幾つの会社から依頼が来るとおもう？、数え切れないぜ」

「みんな、お前を、雇いたがってる。大きいところからいくと、ギ  
デオン重工、フジ工業、ロッキー重機、ラフラックス重工、ハヤ  
ブサCOM、メンタル、ハイソーサー、プースト、ピュアアイランド  
、ははははは、」

オズが言葉の最後で鼻で笑い、皮肉っぽくこう付け加えた。

「みんな“モンライム”と、やりあってるやつばかりじゃね〜か〜」

「ピュアアイランドなんて聞いたことないぞ」とジョーが口を開く

「うぬ、確かに聞き覚えはないが依頼が来てるから・・・、あ〜  
どこかの子会社かもしんね〜が」

オズが首をかしげながら手元のノートパソコンをのぞきこんだ。

「こいつあ〜、驚いた、ピュアアイランドって会社、交渉に応じな  
ければジョーの首に賞金を掛けるとよ。」

「なに様だ〜こいつは、期限まで切つてきやがってる。」

「お父さん、センター」

運転席から声がした。

トレーラーがヘリオス基地の中心部、管理管制センターについたよ  
うだ。

「悪いオズ、お前の冗談はいつも楽しいよ、用事だ、またな！」

「あゝ、しばらくわしもレジアスでうるちよろしている、用があったら声をかけて・・・！」プツッ

オズの会話の途中でジョーは回線を切り、立ち上がった。

ロマンスグレーのオールバック、口髭、視線を他人に感じ取られないように掛けたサングラス

ジョーの風貌はまさにダンディーのオンパレードだ。

「クリア、留守番だ！ “マッドサンダー” の調整を頼む」

栗色の長い髪の美しい少女はジョーの娘でクリアという名である。

「エー、基地についたら買い物に行つていいって言ったじゃない。」

返事もなく、ジョーは外に出て行った

クリアは、毎度のことと飽きれていた。

「返事くらいしなさいよゝ、もう」

反論もむなしかった。

先ほどまでジョーがオズと電話で会話していた部屋で電話が鳴った。クリアは腹を立てているのか電話を無視している。

やがて電話が留守録に切り替わった。

TV電話のモニターに、めがねを掛けた細身の中年男性が映し出された。

モニターの左下側で”REC”マークが点滅しだすと男は話始めた。

「久しぶりだなジョー、ウォーレンだ。」

“ウォーレン・ギルモン”とモニターの下に相手の名称と電話アドレスが表示されている。

「少し、相談に乗ってもらいたいことがあって連絡したのだが、・・・」

レジアスにくることがあつたら、キルメス研究所によってくれないか？

・・・」

聞き耳をたてていたクレアだったが

急ぎの用事ではなさそうなので、父親の命令を無視して買い物に

出かけることにした。

ヘリオスベースの周りにはショッピングで有名なモール街が数多く軒を並べている

多分、そう長くはないであろう滞在時間に、父親の言いつけを守れる余裕など

クレアにはなかった。

ツナギから薄でのブラウスに着替え軽く化粧を済ませると、

トレーラー運転席後部のハッチから取り出した電気スクーターにまたがって

トレーラーが入ってきた道路と反対方向へ猛スピードで消えていった。

ジョーの大型トレーラーの両横には

各々の自慢の武器を携えて、ヘリオスベースに就職活動にきた、傭兵達の

何台もの大型トレーラーがずらりと並んでいた。

ソルジャー

傭兵の種類にも色々あり

企業の専属になる者

作戦ごとに報酬を受取る者、

管理管制センター前に並んだトレーラーの持ち主達のように

自前の武器持参で高額報酬を受け取る物

体みのみ参加で、生活の糧程の報酬を得るもの

各々が資産レベルによって

戦場規模、報酬を選び、企業側の審査が行われ  
それをパスすると雇用契約が結ばれるのであった。

## Chapter 1 未来錯誤 02 前戦

### 02 前線

バタバタとプロペラの轟音が  
決して小さくはない“ソルジャー（傭兵）”達の声を掻き消してい  
た。

歩兵部隊輸送ヘリが、ヘリオスベースから出勤してすでに3時間が  
経過していた。

岩肌がごつごつとむき出しの荒野から、緑豊かな森林地帯に地上の  
景色は変わっていった。

「こちら、ドラフトキング、まもなく、タッチダウンポイントだ。」  
輸送ヘリ”ドラフトキング（作戦コードネーム）”のパイロットが  
ヘルメットから突き出ている  
ヘッドマイクに向かいそう告げた。

「オメガ01から04、オメガリーダー含む4機が先行する。」  
護衛の戦闘ヘリからの無線連絡と同時に

4機のヘリがスピードを上げ輸送ヘリの前方へ、遠ざかって行った。

オメガ隊を構成する戦闘ヘリは、

機種下方に単芯のガトリングガンを標準装備、単座式コクピット、

一基のジェットエンジンをプロペラシャフト後方に備え

コクピット側面から張り出した両翼には、各種爆雷、ミサイルポツ  
ド、

サイドワインダーなどがオプション装備できる。

20年ほど前にコ・モンラム社の傘下にはいった。

ブラウニー重工業社製の”ブラウニー32式FH戦闘ヘリ”で編成されていた。

装備しただいであらゆるタイプの戦闘が可能で

小型で小回りの効く、生産コストを押さえた万能型ヘリである。

ドラフトキングと呼ばれる輸送ヘリも

ブラウニー重工業社製”ビッグベアー102式SYH輸送ヘリ”

機種前方にコクピットをかまえコクピット下部に唯一機関銃の装備がほどこされている

上部に2連のローターを備え、後部大型ハッチ内の格納庫には、小型の装甲車も搭載できる。

おもに兵員や陸戦部隊の輸送に主力配備されていた。

「オメガリーダー及び、02・03・04はT3ポイント通過後、

3キロ先で警戒に当たれ！」

「05は、ドラフトキングの前衛警戒を

06以下の残りの各機は周囲を左右展開、各自上空を確保しつつ警戒に当たれ」

ビッグベアー102輸送ヘリの格納庫で、隊長らしき男が、

30人の歩兵部隊に作戦の最後の支持を与えていた

30人の歩兵は、3班で各10名

各々リーダー1名、アシストリーダー1名計6名が、コ・モンランム社の専属ソルジャーであり

残りはずべて、スラムの低レベルソルジャーで構成されていた。

「いいか、最終確認だ。タッチダウンポイントに本機着陸後

アルバート班、ノエル班、キース班の順にタッチダウンポイントから、解散しろ

本機力が着陸して、離陸するまでの時間は1分30秒

タイムオーバーのやつは俺が突き落としてやる！」

タッチダウンの間、敵の攻撃がなければ

全員、降機後、本機及びオメガ隊とも即この場を離脱する  
タッチダウン中、もしくはそれ以前に攻撃を受けた場合  
本機は貴様等を棄てた後すぐに離脱するが

オメガ隊は貴様らが姿をくまらずまで、援護する。

第一警戒ライン通過、先遣部隊と合流前にフラックス軍との交戦は  
出来る限り回避しろ、

ターゲットポイントの制圧完了時に、貴様らの口座にボーナスクレ  
ジットが振りこまれる

各自、装備確認！」

30人各々の兵士が自動小銃、防弾ジャケットなどの装備を確認する  
ヘルメットの左目上部分の、可動式ナイトスコープ謙サーモスコ  
ープをチェックする者や

防弾ジャケットに取付可能な、弾薬、手榴弾、数をチェックする者

ズドン!!!

突然、爆発音が鳴り響き、ビッグベアー102輸送ヘリが大きく揺  
れた

格納庫に警報が鳴り室内が真っ赤な警戒ランプで照らされた

ビッグベアー102の左翼に展開していたオメガ隊の戦闘ヘリ07が  
火の塊となって墜落していった。

「オメガ07対空ミサイルによって被弾撃墜された。」

「ドリフトキング高度をあげる、狙いうちされる。」

速度の遅いビッグベアー102は真っ先に対空砲火の餌食になりえる  
オメガリーダーからの指示でビッグベアー102輸送ヘリは上昇体  
勢に移った。

森林の間からオメガ07を撃破したミサイルの発射痕煙が、尾を引  
いていた。

オメガ06が煙の根元に向け対地ミサイルを威嚇発射した。

と同時に、森林の各所から地对空砲の砲弾がいつせいに発射されビッグベアー102とオメガ部隊を掃射した。

ビッグベアー102に何発かの砲弾が命中したが、数が少なかつたため致命傷になるほどではなかつた。

身の軽いオメガ隊は軽く掃射をかわし、対地攻撃を開始した。

機体重量の重いビッグベアー102には、この弾膜網を抜けることは難しかった。

弾丸が鉄の表面に叩きつけられる音が鳴り響き機銃の掃射を受け続けていた。

「放火が、激しすぎる。回避は不可能だ。タッチダウンポイントを変更する。」

9時の方向に“ステージ（着陸可能地点）”がある。「パイロットがそう叫んだ。」

左翼を見据えたパイロットの目の先に森林間沼地があった。

「オメガ隊、タッチダウンポイントを左翼沼地に変更する。援護を頼む」

オメガ隊の返事が返らぬうちにビッグベアー102は大きく機体を傾かせ左旋回を始め下降しだした。

機体右側に、何発も被弾するも、機能部に損傷はなくホバーリング体制に移った。

高度の下がつたビッグベアー102を補足したフラックス軍のハンター（AIを備えプログラムによって動く無人のロボット兵器）が、森林の木々の間から沼地にとび出してきた。

少し立ち止まると上空を見上げロケットランチャーを放った。

近距離から打ち放たれたロケット弾はドラフトキングの機体をかすめ前部ローターにからんで爆発した。

ドドドドーン!!!!



致命傷である。もはや高度や姿勢を維持することは出来なかった。

「まずい」オメガ15の機体がロケットランチャーを放ったハンター目掛け

ガトリンク砲を掃射する。

ハンターのはばらばらに砕け散り、沼地にオイルや破片が飛び散った。

前部ローターを破壊されバランスを失くしたビッグベアー102が機体を大きく回転させながら沼地に

墜落した。

沼地の水が大きく飛び散り、ドラフトキング墜落の衝撃をつつみこむ。

水しぶきの中に美しく虹があらわれた。

「オメガリーダー、こちらオメガ09 ハンターが多数森林内にいる模様、

電磁パルスナパームを投下ます。」

「致し方ない、許可する。派手な戦闘は避けたかったが

このままではドラフトキングのソルジャーがなぶり殺しにされる。」

オメガ09が対空砲火をかくぐり、墜落したビッグベアー102からある程度距離をおくと

木々の間に電磁パルスナパーム弾を投下した。

高々と落下地点から火柱が上がると周辺の森林が火炎に包まれた。

フラックス軍のハンターは燃え盛る火炎に包まれる中、

電磁パルスによって一時的に機能を停止していった。

動かなくなった火の中のハンターを、オメガ隊が上空から狙撃していった。

頭を手で押さえながら、ドラフトキングの指揮管が傾いた機体の中で

立ち上がった。

「炎が収まったら。総員本機を離脱  
俺と本機乗員はキース班と同行する。」

とコクピットにつながるマイクを取るが、

少し耳に当てた後マイクを床にたたきつけた。

パイロットはすでに息絶えていた。

沼地を取り巻く森林が焦土と化し、

電磁パルス歩兵達は勢いなく森林地帯に降り立った。

墜落の衝撃で、もうろうとしていた者がほとんどであった。

オメガ隊は機能障害で一時的に停止しているハンターを殲滅し変更  
されたタッチダウンポイントの安全を確認すると

ヘリオスベースへの岐路についた。

ビッグベアー102の歩兵達は、ゆっくりと夜の近づいた森林へと  
足を踏み入れていった。

## Chapter 1 未来錯誤 03 マッド・サンダー

03 マッド・サンダー

8インチ程の小さなモニターに映し出されたのはヘリオスベース滑走路の管制官であった。

「モンランム専属特Aソルジャー、ジョー・クレンナ

登録形式ソ・リアテック77式BHV T-01戦闘ヘリ、コード名称“マッド・サンダー”

発進の許可をする。」

「了解、オールグリーンだ。」

重量感のあるパイロットヘルメットをかぶり、パイロットスーツに身を包んだジョーが

マッドサンダーと呼ばれた戦闘ヘリのコックピットから管制官に向かい口を切った。

「ターゲットポイントの、データ送信を頼む、」

マッドサンダーのメインローターがゆっくりと回転し始めた。

メインローターの回転数が上がってくると共に

テールローターも回転を始め、空気を切裂く音がしだいと大きくなっていった。

「本出動は特別許可になり、貴方が作戦に参加することによって得られるクレジットは0です。」管制官が冷徹にいった。

「百も承知だ。」

ジョーが答える。

「武器弾薬の燃料等の消費も自己負担になります。お忘れなく、」

少し間をおいて、表情を和らげた管制官が

「本作戦に参加する理由をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「野暮用だ！」

と吐き捨てるようにジョーが返事を返した。

「発進するー！」

それ以上管制官に質問させまいと、スロットレバーを一揆にあげジョーはマッドサンダーの機体を上昇させた。

ブラウニー戦闘ヘリが数十機並ぶ発着デッキから

マッドサンダーは対地用の重装備を施し夜の空に飛び立った。

待機中のブラウニー戦闘ヘリを照らしていたスポットライトが

マッドサンダーの方に向きを変え照らし出し

発進を見送った。

マッドサンダーのコックピットにターゲットポイントの地理情報が送られてくると、

ジョーはスロットル脇のキーボードをカタカタとはじきコンピューターに入力を済ませた。

やがて基地管制塔のスポットライトが届かなくなり。

マッドサンダーのヘッドライトと、識別灯が暗闇の夜空に浮かんだ。

ソ・リアテック77式BHVT-01戦闘ヘリ、コード名称“マッド・サンダー”は

ソ・リアテック社の研究機関で、特殊オーダーにより開発された。

モンランム社の“レジラス・ウルティマ・トライセルプロセッサ”

(モンランム社外非売品で社内でも管理者クラスでしか仕様できない)を

それを制御コンピューターに搭載した世界でたった一機(生産コス

トが非常に高価なため）の重装備可能な多目的戦略ヘリである。  
縦列複座式、機種下方に機種前面に取り付けられたカメラと照準機  
で適格に目標物にヒットする3連砲身回転式40mmガトリンクガ  
ンを装備、

砲後方にガトリンクガン弾3万弾ストック庫を備え付可能

コックピット前席両脇下部とコックピット後席後方両脇に可動式ジ  
ェットエンジンを計4機搭載、長距離の高速移動が可能で、ジエッ  
トエンジンの可動により恐ろしく急激な小回りも実現  
前部ジェットエンジンの給気口上部ら、棒状の特殊ソナーが前方に  
向けて張り出し、索敵能力に丈けている。

コックピット後席側面から張り出した両翼には各種ミサイル。爆雷。  
ミサイルポッド。長距離遠征用の予備燃料タンクなどが装備でき、  
両翼端には各種サイドワインダーを3機、計6機搭載

後部可動ジェットエンジンのカバー部にグレネード弾などを装備可能  
本体からテールローターまでの尾翼の下部に、後方かく乱用のブイ  
と後方迎撃用の小型ミサイルを発射できるシャフト口が二つ

メインローターの羽は5枚と高馬力

テールローターは鋼鉄製のカバーに囲まれ

機体下部には。ラウンドモービルなど運搬用のアームが収納されて  
いる。

着陸時に必要な車輪3つは滞空時は収納可能

同クラスの戦闘ヘリではマッドサンダーの戦闘能力を上回る物はあ  
りえないといえよう

戦場では、ジョーの操縦テクニックとあいまって文字通り“狂雷”  
とがす。

狂雷は、おとなしく闇夜の空を東へ向かった。

「シンクロ率、拒絶反応を確認します。」

何処かのモニタールームの一室で声がした。

「サテライト1 +49・2-49・2 +43・8-52・1  
 サテライト2 +49・1-49・6 +43・9-52・9  
 サテライト3 +48・1-49・3 +44・9-51・1  
 サテライト4 +49・1-49・9 +46・9-53・1  
 サテライト5 +49・1-49・9 +60・9-59・1  
 サテライト6 +48・4-48・2 +59・9-49・1  
 サテライト7 +48・6-49・2 +53・9-49・8  
 サテライト8 +3・5-69・8 +83・9-0・23  
 全て拒絶反応0でオールクリア」

「サテライト8のみ、に動きが見られません！」

「検体の、脳活動に見られる異常な状態が依然継続されています。」

「穴埋めするかのように、の動きが活発になつて動作、シンク口補てんしているようにも見られます。」

モニターの明かりに照らされた薄暗い部屋の中で研究者達の声だけが響き渡っていた。

04 第一警戒ライン

夜の闇が、森林を覆っていた。

暗闇に一瞬閃光がきらめき、何秒かおくれて轟音が鳴り響いた。と、同時に、東方の林間から銃弾の熱を帯び発光した多数の弾導が、猛烈な勢いで

西方の森林にめがけはなたれた。

・・・また、爆音が夜の闇の森林に鳴り響いた。

西方の森林に着弾した銃弾が目的物を破壊し続けた。

「はあ、はあ、はああ、はあ」

闇の中から、必死に高まった鼓動を抑えようとする幾つもの吐息が木々の間から発せられていた。

爆発がどこかで起こり、その閃光が

地を這い、息を殺し自動小銃を構える何人かの兵士を照らした。

ドラフトキングで森林に降り立ったアルバート班の隊員達であった。

すさまじい爆発音が鳴り響き続き、繰り返された。

隊員達は、爆発の勢いが鎮静化するのを、

ただただ、身を伏せて待つしかない状態に置かれていた。

アシスタントリーダーのモルフィスが、囁き声で舌をうつつた。

「くそつ、第一警戒ラインまでもう少しなのに、」

スタン、狐目の傭兵がつぶやいた。

「先方もラインを、越されるとやばいってことさ、」

「いや、警戒ライン内輪にハンター（AIを備えプログラムによって動く無人のロボット兵器）や陸戦警備部隊は特に配備されていないはずだ

第一警戒ラインで、誰かがどじを踏んだ可能性がある。」

スタンの言葉を、190cm長身のハンスが冷徹に否定した。

フラックス社軍タピオンベース、

レジアシティに一番近い“コ・モンランム”と対立する“フラックス社”の軍事戦略基地

中心から半径10キロメートルの

円周上に第一警戒ラインは設置されていた。

前後200メートル木々は一切生えておらず。

有視確認できない赤外線ビームが50cm感覚で碁盤の目のごとくはるか上空まで

高度10000mの地点で地面と平行してはりめぐらされていた。

ビーム内には進入物を感知するセンサービームと

精密機器、電子機器を、一時混乱させるパルスビームが混在しており侵入の際これに触れた兵器、電子機器は機能障害を起こし一時コントロール不能に陥る

その瞬間をねらって、

ライン内森林部に設けられた自動砲台、自動ミサイル発射台などによって

センサービーム感知地点を攻撃し動体感知が終了するまで攻撃を繰



り返す。

また上空高度10000mの網状ビームには、電磁分解派などが含まれており

衛星軌道上からの詳細な地上情報が読み取れなくなっていたり、レーザー攻撃などのレーザー粒子などの熱源を拡散させる役割が備わっていた。

レーザービーム発信源はタピオンベース付近のコントロール施設にあり

この目に見えぬ障壁を兵器、もしくは乗り物、あらゆる電子機器によって通過することはほとんど不可能であった。

おそらく歩兵だけが50cmの間隔の網目を通り抜けることが可能で、

ヘリオスベースからタピオンベース調査攻略のための派遣は日々繰り返され

慢性化していた。

何発もの流れ弾や砲弾が闇の森林に光を与え  
アルバート班が身を隠す近辺に飛来し続けた。

うずくまったモルフィスが、

動体感知及び識別信号などを感知する機器を右手に持ち覗きながら

「ノエル班の識別信号が消えていく、」

「やっぱりどじを踏みやがった。

早く全滅しやがれ、こつちまでもたねえ」

ハンスが砂煙に巻かれながらしかめっ面でそう唸った。

うずくまる中、一人の男が胸から零れ落ちたペンダントを握り締め

爆発の閃光で、ペンダントの刻印文字を見つめていた。

『FOR ロブ・キンズキン

FROM レイチエル・フローズン』

男女の人名のようだが、何度見ても男はこの名前に聞き覚えもなく記憶にも残っていないかった。

それどころか、なぜこのペンダントを所持しているのかもわからなかったのだ。

「ノーバディー大丈夫か？」

その男の名前であった。

「ああ、大丈夫だ、バーキン、」

ヘルメットを深々とかぶりゴーグルをはめ防塵用にマスクで口を覆っていたノーバディーがバーキンに答えた。

流れ弾の勢いはさらに激しさを増し………  
やがて収まった。

「ノエル班の反応0です。」

モルフィスがそういうとゆっくり隊員達は立ち上がった。

隊員達は少し前進することにした。

ハンス、BDという名の傭兵二人が大きな対戦車無反動機銃をかまえ先頭にたち

木々に見を隠しながら

左応右応しながら、隊員達は第一警戒ラインの座標にまでたどり着いた。

辺りは煙が立ち上り激しい爆発の跡があり、  
ばらばらに散らばったノエル班の装備や隊員達の体の一部が転がっ

ていた。

「ざま〜ね〜な〜」

モルフィスはそういうと、ヘルメットのスコープを下ろしナイトモードから赤外線探知モードに感知度を切り替えた。

目の前に広がった赤外線センサービームは碁盤の目のように左右上空にまで限りなく広がっていた。

その間隔は50cm四方で、人がなんとか通過できる大きさであった。

「ヒュ〜〜」

風を吹くような音にならない口笛でモルフィスはその光景を賛美した。

「敵ながら、天晴れだぜ」

全員がスコープをおろし、赤外線探知モードに切り替える。

「まず、大型銃器や荷物を投げ入れろ」

アルバートの指示で隊員達は装備品を体からはずし、センサーの内側へ投げ入れた。

「一人づつ、前後がサポートして通過しろ、

ビームに絡んだら、命はないぞ」

アルバートが冷徹な声でみなに注意を促した。

一人づつ慎重に、通過作業を繰り返した。

センサーを全員通過が完了すると隊員達はどつとその作業に疲労を感じ

次の、行動に移るべく気持ちを切り替えた歩きだした。

傭兵のギルだけはライン付近に残り何か仕掛けを設置していた。残りの隊員は警戒態勢をとりながらゆっくりと歩き続け、再び森林の中に足を踏み入れ続ていた。作業を済ませたギルがその後を追った。

闇夜を低空飛行で東進するマッドサンダー

「アルバート班、キース班、第一警戒ライン通過」

モニターの下部に表示された。

「少し、のんびりしすぎたな」とつぶやき

ジヨールはマッドサンダーのジェットエンジンすべてのスロットルを上げた。

すさまじい吸引音がジェットエンジンの吸気口から巻き起こると同時に

マッドサンダーは爆発的に加速した。

ジヨールはすさまじい加速Gに耐えながら

キーボードを操作し、フラックス軍 タピオンベース第一警戒ライン情報の整理を始めた。

タピオンベース詳細がモニターに映し出される。

隣接してミサイル工場と、人口三万人ほどの小さなシティがあり半径10キロ四方を第一警戒ライン、5キロ四方で第二警戒ライン第一警戒ラインにはコンプリートレベルの難易度MAXが表示された。

次にマッドサンダーが第一警戒ラインのパルスレーザー通過時に受ける機能障害度をシュミレートしてみる。

飛行駆動系メインローター、テールローター、ジェットエンジン、オールダウン

感知系、オールダウン

銃火器系、オールダウン、その他諸々、オールダウン

コントローラPC系、オールダウン、手動操作により再起動

起動後機能障害残留率98%、PC障害修復タイム75秒

PC完全復旧後

全システム自然復旧タイム3600秒 PCサポート復旧タイム5

99秒

「マッドサンダーといえど、第一警戒ラインをまともに通過したら、ただの鉄の塊になるってことか」

ジョーは頭をひねっていた。

## Chapter 1 未来錯誤 05 タピオンベース

### 05 タピオンベース

けたたましいサイレンが  
フラックス軍タピオンベースに鳴り響いた

基地の様々の明かりで夜の森林の海の中にぽっかりと浮いた島のよ  
うに見える。

「敵機来襲、敵機来襲！」

「亜音速で東方より接近、味方、同盟軍の発する友軍識別信号確認  
取れません。」

「飛来飛行体、機数不明、確認中！」

防御体制へのシフト動作のため基地管制塔内があわただしく人がい  
きかいた。

司令官らしき男の一步後ろで参謀長が口を開いた。

「第一警戒ラインシステムの、哨戒行動かとおもわれますが？」

司令官が大きく映し出された正面レーダーモニターを見上げ

「VTOL、FH-067、3機スクランブル、第一警戒ライン内  
で待機させる、」

垂直離着陸ジェット戦闘機“フジ工芸社のFH-067EX VT  
OLマーカス”の発進を促した。

タピオンベースの第一警戒ラインは難攻不落で越えて生きて帰った  
者はいなかった。

VTOLマーカス3機はマニュアルどおりの出動で

領空接近者に対しての威嚇行動が目的であった。

格納庫内から出てきたVTOLマーカス3機は、滑走路に出るとその垂直上昇機能を使わず、長い滑走路を利用して飛び立っていた。

「侵入機、識別」

司令官席より一段下がった。オペレート席から声が上がった。

「ソ・リアテック77式BHVT・・・」

そこまで告げてオペレーターが言葉を詰まらせた。

「どうした？」

司令官が言葉を詰まらせた意味を問いつめた。

「すみません、ソ・リアテック77式BHVT-01戦闘ヘリ」とオペレーターの続きの解説に

「ヘリ？ジェット機並みのスピードではないか？」

司令官が疑心の目でオペレーターに問いかけた。

「間違いありません、・・・コード名称マッドサンダーです。ヘリであることと、誰もが知っているコード名称をオペレーターは言い放った。

司令官がオペレーターを睨みつけ

「なに～～、マッドサンダー（狂雷）??」  
と叫んだ。

一瞬管制塔内でざわめきが起こった。

「あの、ジョーがきたというのか？……  
……スカイ・ジョーが？」  
管制室内で誰かが叫んだ。

“スカイ・ジョー”

マッドサンダーに搭乗するジョー・クレンナに付いたニックネームであった。

ジョーが、あらわれると雷が落ちる、狂った雷が

ジョーが通り過ぎるとそこには、何もなくなり、空になる。

空になる。なにもない空に……SKY……

V T O L 垂直離着陸ジェット戦闘機3機といえどスカイ・ジョーの敵ではない、

あっけなくやられてしまふに違いない、誰もがそうおもっている。

「僚機は、ありません。単独です。」

オペレーターはそう促すが

マッドサンダー単独一機だろうとそれは、同じことであった。誰も  
がそれを分かっていた。

「V T O L マーカスを、10機追加発進させろ！」

先ほど出撃した3機は第一警戒ライン手前で待機！」

司令官があわてて追加出撃を促す。

参謀長がそれに対して意見をす。

「“コ・モンラム”の重大軍事作戦にスカイ・ジョーが極秘投入  
されると必ず大勝利を導いています。

スカイ・ジョー自身の戦果の記録はあいまいではつきりと残されて  
いませんが、戦火を交えた者たちの間では神憑りな噂が飛び交って  
おり、耳を疑うような内容ばかりです……



しかしです。・・・

スカイ・ジョーといえど、我がタピオンベースの誇る第一警戒ライン突破は不可能ではないでしょうか？これ以上の出撃は無意味かと？・・・

目的もわかっていませんし、もう少し様子を見ては？」  
参謀長の意見は司令官には届かなかった。

それどころか薄笑いを浮かべ、こう切りだした  
「ふふ・・・。僚機なし、単独というのが幸いだ。

なにが目的でやってきたのかは知らぬが、  
我が基地で奴をしとめてやるうではないか、第一警戒ラインを超えてくることは、なんなりとも不可能、どれだけ奴がすごかろうと、戦果が“タピオン陥落”とはいかんだろう、」

オペレーター他、管制室の全員が驚愕の表情を司令官に投げかけた。  
司令官は基地内全部の回線を開くと、意気揚々とマイクに向かいしゃべりだした。

「タピオンベース待機中の航空部隊全パイロットソルジャー（傭兵）  
諸君につげる。

現在我が基地西方から“コ・モンランム”の戦闘ヘリ、マッドサンダーが接近中！

ただいまよりマッドサンダー撃墜ミッションを敢行する。  
希望者は各機搭乗後、搭乗機端末よりエントリーを行へ、  
戦闘機、戦闘ヘリ、戦闘航空機は全承認する。  
誰が撃墜しても参加全員に通常機撃墜の10倍の特別クレジットを支給する。

戦闘域は、西側第一警戒ライン外と予想される。  
当基地のVTOLマークスもすでに13機出撃した。

出撃機全機で協力し、我がタピオンベースに

“スカイジョー撃墜”の名誉を与えてくれ！」

それぞれ機種の違いが戦闘ヘリがずらりと並んだ格納庫内で自機の整備をしていた傭兵達が放送を耳にしていた。

「あほくさ、よってたかって俺達雑魚が何匹集まるって、やっぴかなうわけないさ、」

一人のひげ面の傭兵はそう言うと、自機の整備を切り上げどこかに消えていった。

何人かの傭兵も、ひげ面の傭兵と同じ意見らしく放送にしらをきった。

「俺は行くぜ」と、

自機の戦闘ヘリのコクピットに乗り込んでいた男が、コックピット内の端末にエントリーの入力を始めた。

「マグワ本気か？」

と機の横に立っていた背の高いふとちよの男が制止しようとした。

「お前も来いよ！ガイル」

マグワが背が高くふとちよのガイルを誘った。

「冗談じゃない、俺はまだ死にたく無いぜえ、」

ガイルがそう言うと

「馬鹿かおまえは？・・・正面きってやりあうわけじゃねえよ、第一警戒ライン内からでも殺れるかもしんねえし？」

誰かが殺ってくれてもいいわけだ。やばくなったらずらかればいい、

「

マグワはそう言い足した。

ガイルはきよとんとしていた。

「そうだな、VTOLが全滅つてのを、目処に撤収すれば・・・どの道ラインをこえてくるなんざ、不可能だ」

自機端末からエントリーコードを入力し終えたマグワがあきれ返っているガイルに向かっていった。

「エントリー完了!!」

マグワの機にミッションエントリー承認の連絡が入った。

「行くぜ、間近でみて見たいじゃないか、・・・スカイ・ジョーを・・・」

それに、スカイ・ジョーと絡めば女にももてるだろうよ!」

と、マグワは上方に開放されていたキャノピーをおろすとエンジンを始動させた。

メインローターがゆっくり廻り始めた。

ガイルの後ろで二人の会話を聞いていた数人の傭兵達も

マグワの意見に賛同し自機に乗り込んでいった。

取り残されたガイルもあわててズングリとした大型のへりに乗り込んでいった。

マグワの機が上昇を始めた。

すさまじい轟音を放つマッドサnderのジェットエンジン

マッドサnderの後部はジェット噴射の明かりで光光としていた。

「ヘリオスベース管制塔よりマッドサンダーへ」

ジョーのもとに無線連絡が入った。

「タピオンベース滑走路より」

FH-067EX VTOLマーカス13機と、多種類のジェット戦闘機7機、戦闘ヘリ8機の出撃を確認した。」

「承知している。」

ジョーが、もごもごと返事した。

「通常の警戒態勢とは様子が違うようだ。おそろく……マッドサンダー討伐が目的ではないかとおもわれる。」

「ヘリオスベースもしくは、近隣の駐屯軍からもそちらに応援を出そうか？」

「野暮用だからな、そこまでは必要ない、」

ジョーはきっぱりと応援を断った。

「しかし、相手が多すぎないか？」

「第一警戒ライン内に友軍の応援がとどくかな？」

「まさか、ラインを突破する気なのか？」

ジョーの右口元が釣りあがった。

「悪いことはいわん、冷静になれジョー」

司令官の言葉を制止するかのようジョー話した。

「せっかくの好意だありがたく頂戴しとくよ、ミサイル攻撃の応援を頼む、」

発射のタイミングと座標はこちらからデータ入力する。  
一番近場の友軍ミサイル砲台にシンクロしてくれ、」  
ジョーが応援を受け入れた。

「了解だ、健闘を祈る！」  
無線が切れると、再びジェットエンジンの噴射音がジョーの耳に入ってきた。

アルバート隊は、第一警戒ラインより  
タピオンベース側に2キロほど近寄った地点にいた。  
ハンス、BDを先頭に歩を進める。

突然、左翼を警戒していたノーバディーが皆を制止した。

「全員伏せる」

ノーバディーが警戒した10時の方向と隊員達の間  
大木が横倒しになっていた。  
隊員達はそこに身を隠すと

警戒した方向をノーバディーがナイトスコープで見据えた。

「ハンターか？」

アルバートがノーバディーに尋ねた。

「わからん、ハンターとは気配が違う」

ハンターとはAIを組み込まれたロボット兵器のことで、ノーバ  
ディーの感じた気配は  
もつと人的なものだった。

BDが、ナイトスコープで見渡す。

「何か見えたか？」ハンスがささやくような小声で聞いた。

「見えね〜が、・・・なんかいるぜ・・・」  
BDにも感じているようだ。

こちら相手もお互い出方を待っているようだった。

・しばらく不思議なくらいの静寂が続いた。

06 歩兵狩り

「けっ、けっ、けっ・・・見つかったかな？」  
類のこけたギョロ目の男が、何かの乗り物のコクピット内で？  
モニターの青白い光に照らされ気味の悪い声で独り言のように言っ  
た。

「感のいいのがあるようだ。楽しませてくれそうじゃないか？兄貴  
！」

もう一人、先の男とそっくりな顔をした男が、同じような乗り物の  
コクピット内で  
先の男に話しかけた。

「ザビー、俺達ばかり楽しんで相手は失礼だろ？」

「楽しませてやらなくては、いつひひひ」

「ちょっと、つついてみてもいいかい？兄貴？」

「いいぜ、まだ。殺っちまうなよ」

「わかってるって、先制攻撃といくかな、」ザビーの方が少し動き  
を見せた。

アルバート班の左側60m程はなれた茂みの中からそれは立ち上がり  
アルバート班めがけて、砲身が5本ある回転式のガトリングガン  
を掃射した。

トトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトト

アルバート班が身を隠している倒木を着弾の振動が襲った。

「ラウンドモバイル」

ノーバディが叫んだ。

「2台だ」

とっさに身を伏せた。BDも叫んだ。

「NXインダストリーのトータスNXR-2085だ。トータスの最新型だ。」

モルフィスが動体センサーの識別コードで

ラウンドモバイルと呼ばれた敵の形式を読み取った。

「まずいぜ、トータスの新型の装甲はこいつでは打ち抜けねえぜえ  
！」

語尾を荒げて構えていた大型の対戦車機銃をさしてハンスがいった。

ラウンドモバイルとは身長が2.5m〜3m一人のりの

人型二足歩行装甲陸戦ロボット兵器で

主に陸戦兵器を開発生産するNXインダストリー社製

ラウンドモバイル”トータス“は同社のパワードスーツ”タートル

“と並び

最大のヒット商品であった。

タートル、トータスともに亀と呼ばれるだけあり装甲重視の設計で  
特に、最新型トータスは装甲が厚く対戦車ライフル、機銃、通常の  
弾丸などものともせず、

陸戦部隊の前衛配備用として開発されたものであった。



と、そのときだった。

二台のラウンドモービルを大木をはさんで背にしていた。

隊員達の正面からロケット砲の弾丸が襲った。

ドツカ〜ン！！

隊員達の中央で爆発が起こり隊員達は右へ左へ吹き飛ばされた。

BD、ハンス、バーキン、ノーバディ、ギル、モルフィス、アルバート

が地面にたたきつけられた。

残りの3人は跡形もなく吹き飛んでいた。

正面にもう一台トータスが現れたのだ。

BDが立ち上がり、

「やる〜、うお〜〜〜」

叫びながら、対戦車機銃を乱射した。

その隙に、全員が、たたきつけられた痛みをこらえ立ち上がり、個々に身を隠した。

BDの対戦車機銃の弾丸は、前方のトータスに命中しているが、すべてその厚い装甲に跳ね返されていた。

ノーバディがBDの前のトータスめがけて手榴弾を投げた。

トータスは、右手に仕込んで有るバルカン砲でBDに狙いを定めているところであったが

手榴弾の爆発で正面の視野をふさがれてしまった。

「やる〜〜！うぜえ〜」

新しく現れたトータスのパイロットが叫んだ。

BDは、急いでその場を離れずそばの大木に身を隠した。

3台からちょうど死角になる位置だった。

「ずるいぞ、ガリイ、3人も殺りやがって」  
三番目のトータスに兄貴が怒鳴った。

「悪い、兄貴、目の前に捉えたんで、疼きをおさえきれなかった。」  
新しく現れたトータスのパイロット、ガリイがそういうと、

「でもよ、兄貴、おかげで奴らのテンションも上がったようだが、  
ヒヒヒ」

ザビーが、ガリイをフォローして不敵にわらった。

まるで、狩りをするかのように現れたトータス3台のパイロットは  
3兄弟であった。

「見るよ、木の影に隠れて、安全だと思い込んでいる。」  
ザビーがBDを補足して、兄に報告した。

「それじゃ、あいつは俺がいたたくぜ」  
と言い放つと、兄のトータスは、シオルダーランチャーからミサイルを発射した。

歩兵相手には、大げさ過ぎるほどの重火器装備が三台のトータスに  
は施されてあった。

ミサイルはBDをその身を隠した大木もろとも抹消させた。

「悪いな、歩兵ちゃん、ちょっと強すぎたかな？ けけけッ」  
兄弟は明らかに狩りを楽しんでいた。歩兵狩りを、

モルフィス、ノーバディー、バーキンが同じ木に身を隠していた。

BDの惨状を見ていたモルフィスは振るえあがり  
「やつら、歩兵狩りの、フェンス三兄弟だああ、」

と叫び取り乱してその木陰から逃げ出そうと飛び出した。

「さて、モルフィス」

ノーバディーが制止したがすでに遅かった。

飛び出したモルフィスをザビーのトータスがいち早く補足して、その機銃を放った。

何発もの銃弾がモルフィスを背中から打ち抜いた。

隊員が着ていたコンバットスーツは、防弾ジャケットもかねていたが、

トータスの放った銃弾はものともせず防弾ジャケットを貫通したのだ。

「いつまで、そんなところにかくれているのさ！」

長兄のトータスから、また、ミサイルが発射されノーバディーとバーキンの隠れていた木を直撃爆発した。

ノーバディーと、バーキンはすばやくそれを察知し、爆発をかわし、茂みに身を隠した。

「バリイ、ザビー、ガリイ、“歩兵狩りフェンス三兄弟”！」

バーキンが伏せながらそうつぶやいた。

「常に、最新型のトータスに搭乗し、歩兵戦のみの低クレジットミッションにしかエントリーしない」

「圧倒的重装備で、ミッション取得クレジットをはるかに上回る消費を戦場で繰り返し

収入のためのミッションエントリーというより

まさに、歩兵狩を娯楽目的としてのミッションエントリーで、どこかの企業の御曹司とも

うわさされている。」

ノーバディは茂みの中からトータスを見据え、バーキンの言葉を聴いていた。

ノーバディにとって初めて聞く話であるが、初めて聞いたような感じはしなかった。

「バーキンここにフラッシュアップ（閃光地雷）のしかけをしてくれ！」

バーキンはトラップの扱いに丈ていた。

「わかった。」

簡単なトラップ装置を、そこに設置設定すると

「アルバートたちと合流しよう」

ノーバディとバーキンは立ち上がり走り出した。

フェンス3兄弟は、一斉にそちらを補足して攻撃に移った。

対人2人に、ミサイル、ロケット砲、機銃掃射で一斉に狙いを定めた。

「今だ！」

とノーバディが、叫ぶと、バーキンは走りながら右手に握ったスイッチを押した。

隠れていた茂みから閃光があがった。

まばゆい閃光が辺り一面を白を通り越した白に包んだ。

そして、そこを攻撃しようとしていたトータス3台の電子アイを、炎症させるに至った。

トータス機内のモニターは真っ白になったまま、焼け付いた。

「くそ、やりやがったな」

バリイがそうつめいた。

「アルバート！」

ノーバディーがそう叫ぶと

アルバートが茂みから身を乗り出し

ノーバディーと、バーキンを向かえいれた。

そこは土が少しくぼんでおり、身を隠すには絶好の場所になっていた。

ハンス、ギルもアルバートとともに、そこにいた。

「作戦を練ろう、まともになりあつて、勝てる相手じゃない」

ノーバディーがそのくぼみに滑り込むと同時に切り出した。

「練っても同じことだ、こちらには、やつらにダメージを与えられる武器がない」

ハンスが、全面否定的した。

「補足されずに離脱することを考えよう」  
ギルが、つけたした。

「トータスは打ち抜けなくても、装備してル武器を破壊することは可能だろう」

バーキンがそういうと、

「先遣部隊と合流することが先決だ。」  
アルバートが一括した。

「どの道、トータス3台を切り抜けるには無理がある。」  
ノーバディーがそう言った瞬間

南東の空からVTOLのジェット音が聞こえてきた。

西へ向かう13機のVTOLの機底が森林の木々の間から確認でき

た。

次に、戦闘ヘリやジェット機も、何機か確認できた。

「ただの警戒にしては物々しいな  
何か、おっぱじまるのか？」

ハンスが見上げながらそう言うと、

「タイミングを、合わせよう、

離脱するにしろ何にしろ、上で起こる事態を利用するほか手はない、

」

ノーバディーはそういったが、

上空でなにが起こるかまったく見当がついていなかった。

## Chapter 1 未来錯誤 07 ドッグファイト

### 07 ドッグファイト

マッドサンダーは全速力で第一警戒ラインに接近していた。

第一警戒ライン内側では、タピオンベースのVTOLマーカス13機と傭兵達の戦闘ヘリが

ホバーリングして待ち構えていた。

ジェット戦闘機隊は高度をとりはるか上空を旋回していた。

ジョーはスロット脇のキーボードに、何かを入力すると

左翼のサイドワインダーを、前方に向けて一発、発射した。

サイドワインダーは真つすぐ飛んで行き、

第一警戒ラインのセンサービームに接触しライン内に進入したかと思うと

サイドワインダーのジェットエンジンが突然停止し失速しだした。

と同時に地表から迎撃ミサイルが飛来しマッドサンダーの放ったサイドワインダーを撃墜した。

「何を無駄な、あんな間抜けなことを・・・ふっ」

マグワが、その行動を見て鼻で笑った。

ジョーがサイドワインダーの状況をトレースしていたモニターから目を離すと、

第一警戒ラインをまっすぐ見据えた。

「さすがに敵機数が多いな、少し数を減らすとするか」

速度はそのまま、マッドサンダーが風を切った。

第一警戒ラインにまっすぐ接近している。

「マッドサンダー、第一警戒ラインに侵入します。」  
タピオン、ヘリオス各々の基地、待ち構えていたVTOL、傭兵達に緊張が走った。

何事もなく第一警戒ラインを通過しそうな勢いで接近するマッドサンダー

ゴーっとジェットエンジンの轟音をとどろかせながら  
勢いがとどまらないマッドサンダー！

「ライン接近、接近！」

「接近！」

「なに、ラインに突入??」  
誰もがそう叫んだ。

突然、ライン寸前でマッドサンダーが機首を左に向けた。

第一警戒ライン内のVTOL部隊にその機腹部を向け、体勢を立て直すと速度はほとんど変えず、北に向かいラインに沿って並走飛行しだした。

「ふゝ、驚かせやがって、越えてくるかと思っただぜ」  
マグワがそう言って、肩をなでおろした。

「越えられるわけがない、コントロール不能になるのは明白だ。」  
VTOLマーカスの隊長らしき男がそう告げたが、一瞬の焦りは隠せていなかった。

「我々VTOL隊を先頭に追撃を始める。傭兵ヘリ部隊つづけ」



「戦闘機部隊は、高度を取って並走するよう」

V T O L、傭兵達の戦闘ヘリがライン内側からゆっくりと距離を置きつつ追撃を始めた。

V T O Lの先頭三機が逆V字型を作り速度を上げた。

第一警戒ラインをはさんでマッドサンダー追撃戦が始まった。

「マッドサンダーのけつが丸見えだぜ」

先頭のマーカスのパイロットがテンションをあげた。

「先頭隊、ミサイルのロックオン圏内にまで接近しろ、！」

最後尾に行くV T O Lマーカス隊の隊長が命令を発した。

「ラジャー、5番、6番、7番機、補足距離まで接近する。」

逆V字の先頭三機が速度を上げた。

マッドサンダーのシグナルを左前方少し上部に見据えた5番機

「ロックした。ミサイル発射する。」

マーカス5番機の両翼下部に備え付けられた対空ミサイルが発射された。

ミサイルは速度を上げラインを越えマッドサンダーに接近していった。

友軍の識別信号が発せられているミサイルはパルスレーザの影響を受けることなく

第一警戒ラインを通過した。

マッドサンダーの後部から攪乱誘導ブイが射出され、

ミサイルを引きよせ、それに命中し爆発した。

6番機、7番機もミサイルを発射した。

また、攪乱誘導ブイが射出された。

と同時に、マッドサンダーの機首が少し下がりにジェットエンジンが逆噴射を始めた。

ミサイルはブイにつられ爆発した。

マッドサンダーはみるみる平行飛行していた。VTOLと距離が近づき

真左下方にVTOLが来ると

バルカン砲を右旋回させ掃射しだした。

鉄の塊である弾丸はパルスレーザーの影響を受けず

ラインを素通りし、5番機に命中

砲芯を右に回転しながらさらに掃射を続け6番機、7番機に命中  
三機は一揆にマッドサンダーのバルカン砲の餌食となり  
爆発！空中分解した。

「VTOLマークス3機撃墜されました。」  
「タピオンベース内で、オペレーターが叫んだ。」

「何、ラインを超えずにやり合って3機を一瞬に、……」  
司令官が考えの甘さを実感したように絶句した。

マッドサンダーはそのままくると、180度転回し、今まで飛んできた方向に進みだした。

さらに距離を置いていた飛行していた後続VTOLの先頭機に、バルカン砲の弾丸を浴びせ撃墜した。

すぐ後ろを飛んでいたVTOLが回避するため急上昇を始めたが無防備な機複部をマッドサンダーにさらけ出し、またもやバルカン砲によって撃墜されてしまった。

さらに後方の三機が牽制のためミサイルを発射し機種を下げ高度を森林の木々すれすれにまで落す回避運動を決定した。

マッドサンダーはバルカン砲でミサイルを撃墜しつつ  
ナパーム爆雷を投下した。

ナパーム爆雷が地上に着弾すると、すさまじい火炎が第一警戒ライ  
ンの内外に広がっていき

機体を下げたVTOL三機を包み込んだ。

ジェットエンジンの吸気口から火炎を吸気してしまったVTOL三  
機は

次々と、エンジンから火を噴き、爆発していった。

後続の5機は、右旋回して追尾体制をときつつ、マッドサンダーか  
ら距離を置く位置まで回避した。

さらに後方に十分に距離を置いていた傭兵のヘリ部隊もマッドサン  
ダーとの距離をおいた。

「なんてやつだ、VTOL八機を、一瞬で撃墜しやがった。」  
マグワが感嘆の声を上げた。

「やつには、第一警戒ラインなんて、全然ハンデになってないじゃ  
ないか、  
というより、俺たちのハンデにしてしまった。」  
ガイルがそういうと

「接近したら、おまえのトンベリ号なんて、真っ先に餌食になっ  
てしまっぞ、」  
マグワがガイルにくぎを刺した。

「そう思う、俺は一足先に離脱するよ！」

「そうしな、俺はもうちょっと、見学としゃれこむ」

「気を、付けなよ」

ガイルはそう告げるとミサイルをマッドサンダー目掛け数段発射して、大きな機体を右旋回し始め帰還体制に入った。

「何しやがる。あおってどうする。」

マグワが焦った表情で、マグワに叫んだ。

「置き土産だ。ははは〜」

「アホか」

呆れ、顔でマグワがつぶやいた。

マッドサンダーは、ライン外側に沿って南へ向かっていた

V T O L 5機は追尾する形をやめ、バルカン砲の届かない距離に遠ざかり

監視体制に移っていた。

傭兵の先頭へり部隊もそれに続いた。

上空で待機中だったジェット戦闘機隊が痺れをきらし降下を始めた。

「イライラするぜ、マッドサンダー攻撃に移る。」

「待て、もう少し様子を、あちらが動くのを待つんだ」

V T O L マーカスの隊長が制止したが、聞かずにみるみる高度を下げていった。

「あちらが動いたからやられたんだろあんたたちは、」

「動く前に、スピードの違いを見せつけてやる。」

先頭の機体が両翼のサイドワインダーを、発射した。

マッドサンダーはぎりぎりのところでそれをかわした。

続いて機首に内蔵されているバルカン砲を掃射

これも、マッドサンダーは難なくかわし

すぐに右旋回し第一警戒ラインから離れ距離をとる。

ジェット戦闘機のパイロット舌をうった。

「くそ、小回りが利きすぎる。」

「当たり前だ、馬鹿！」

マグワが、ジェット戦闘機のパイロットに言った。

後続機も同じ動作で攻撃をするが、まったく同じようにかわされてしまった。

最後の戦闘機が攻撃を終えると右旋回で回避し上昇していった。

マッドサンダーは高度をVTO L隊と合わせ第一警戒ラインから距離をおいたところでまた進路を南に向けた。

「どうする気だ？ラインに侵入してくるでもなく」

VTO Lマーカスの隊長が素晴らしいながらマッドサンダーの様子をうかがっていた。

「動いた！」

マグワが叫んだ。

マッドサンダーが右旋回し更に第一警戒ラインから離れていった。

「退却する気か？」

戦闘機のパイロットが上空に戻った位置からそう告げ

「ラインを越え追尾する。」

と、行動に移った。

V T O Lも並走をやめ少しライン内に近付きホバーリング状態で待機態勢に入った。

「何しでかすんだ？」

マグワの機がV T O Lに接近し、待機態勢に移った。

突然、マッドサンダーが180度向きをかえ

4基のジェットエンジン全開でV T O Lの方向へ第一警戒ラインに直角に直進してきた。

「ラインを超える気か？」

さまざまな憶測を飛び交わせたが、何が起ころうかは誰にも分らなかった。

マッドサンダーはみるみる第一警戒ラインに接近してくる。

「さっき、みたいに猫だましくらわす気じゃねえか？」

マグワが叫んだ。

「マッドサンダー第一警戒ライン再接近！」

タピオンベースの管制塔より迎撃部隊各機に連絡が入る！

マッドサンダーはスピードを落とさず第一警戒ラインに接近してきた。

「突入してくるー!!」  
マグワが叫んだ。

「何、突入するだと、ありえん！」  
司令官がこぶしを握り締めた。

マッドサンダーは今に第一警戒ラインに突入しようとしていた。ライン突入寸前、マッドサンダーのジェットエンジン、識別灯ヘッドライトなどが突然消え、コンソールモニターの明かりだけがマッドサンダーのコクピットに座るジョーの姿を浮き立たせた。すぐにその光も消えると、あたりに、警戒音が鳴り響き、地上の自動砲台からミサイルが数段発射された。

「マッドサンダー、第一警戒ライン通過!!」  
無線が、迎撃部隊に入ってきた。

マッドサンダーはコクピットのコソロールモニターが立ち上がり光で浮きあがると同時に  
4基のジェットエンジンを全開にして急速上昇を始めた。

「ラインを越えやがった。しかもまともに動いてやがる。」  
マグワ達傭兵やVTOLマーカスは、ありとあらゆる武器で攻撃を始めた。

それは地上から放たれた迎撃ミサイルと混ざり合いいくつかは接触して爆発し

いくつかは、切り抜け、マッドサンダーを追尾した。

「越えてきたのか？」

司令官がオペレーターに訪ねた。

「はい、しかも、パルスレーザーの影響をなにも受けていません！」

「突入の瞬間だけ全ての機能を手動停止させたようです。」

「手動で全てをオフにしてライン通過後手動でオンにしたというのか、

全ての機能を呈した割には、起動が早すぎやしないか、」  
司令官が疑問をぶつけた。

「マッドサンダーのPCは“コ・モンランム”の特殊な“レジアスCPU”を使っているようです。その処理スピードの所為でしょう！」

参謀長が答えた。

上昇しながらマッドサンダーは後部攪乱ブイ発射口に併設されている。

ミサイル口から、爆裂ミサイルを発射

マッドサンダーから一定距離を置いてそれは爆裂散開し

追尾してきたミサイルを巻き込んだ。

地上からは、初弾で撃墜できなかった自動砲塔やミサイル台が、攻撃を繰り返した。

上空待機中の戦闘機部隊がマッドサンダーめがけて降下を始めた。

「はさみうちにしてやる」

マッドサンダーはあえて、戦闘機隊のほうへ機種を向け上昇を続けた。



地上から自動砲台のミサイルや、VTOL等のミサイルが、再度、マッドサンダーの後方に接近していた。

すると、マッドサンダーはあおむけになるように、機体を振り返らせ、急速宙返りをして

下降を始めると同時に攪乱誘導ブイを、戦闘機隊の方へ発射した。

下方からマッドサンダーを追ってきたミサイル群は、攪乱誘導ブイに翻弄され

マッドサンダーへの照準をすでに狂わされていた。

「なにーっ！」

上空から降下中の戦闘機隊の正面に攪乱誘導ブイによって導かれてきたミサイル群が飛び込んできた。

先頭を降下中の戦闘機二機がミサイル群に巻き込まれ撃墜された。

残りは、ぎりぎり回避して旋回し、また上昇を始めた。

「へりにあんな芸当ができるのかよ！」

急激に降下しだした。マッドサンダーは、

真上から。VTOLや傭兵達の戦闘へりを襲った。

水平ホバーリング中のVTOLや戦闘へりには、真上からの攻撃に對抗する武器が装備されていなかった。

慌てて機首を上げ出すが・・・

地上からは、マッドサンダーを狙った自動砲台によるミサイルや対空機銃が発射し続けられていて、

行動が制限されていたため

VTOL3機と傭兵の戦闘へり3機が

マッドサンダーのミサイル攻撃によって撃墜させられた。

「タピオンベース、自動砲台の攻撃が行動の邪魔になる。当エリア内の攻撃解除をしてくれ」

VTOL隊長機はミサイルのかいまをくぐり、マッドサンダーの攻撃もかわしながら

慌てて、交信していたが、マッドサンダーのバルカン砲に打ち抜かれ撃墜されてしまう、

戦闘ヘリも2機バルカン砲の餌食となった。

マグワの戦闘ヘリの、右翼にバルカン砲の弾丸をが命中した。

「やばいぜ、むちゃくちゃやばいぜ、」

被弾しながら大慌てで、回避行動をとる。

「リミットの、VTOL全滅、逃げたいが逃げるに逃げられねえ」  
左翼にバルカン弾を着弾し、弾は翼を貫通して、装備していたミサイルポッドに命中した。

「ぐわっ!!!」

慌てて、ミサイルポッドを切り離れたが、爆発の衝撃は機体を包み込んで

体制を立て直すのはとても不可能なことであった。

マッドサンダーは、戦闘機三機を残し

地上の動作を停止した。自動砲台を確認すると

モンランム軍のミサイル基地にシンクロし、ミサイル発射台に攻撃を開始させた。

「ミサイル接近!」

タピオンベースに緊張が走った。

「第一警戒ラインの西北から戦闘空域に多数接近しています。」

「ライン通過後は、意味のないものになるのに無駄な事を」

司令官はそう叫んだ。

「いけません、指令!!!オペレーター早く自動砲台を、停止させた自動砲台の起動を!」

参謀長が慌てて叫んだが既に遅かった。

マッドサンダーからのデータ指令でモンラムミサイル軍が飛来してきた。

第一警戒ラインを通過すると同時に推力を失ったミサイルだが、惰性落下で的確に、近辺の自動砲台、自動対空銃を、せん滅していった。

ジューはマッドサンダー突入時のマニュアルを、ミサイル群にもインプットしていたのだった。

上空でそれを見ていた。戦闘機隊が

「全滅だ、VTOLもへりも自動砲台も！」

「明らかに我々に、勝ち目はないな、」

「マッドサンダー討伐、残存戦闘機部隊、帰還する。」

マッドサンダーの突入した第一警戒ライン辺りは静まり返りマッドサンダーの飛行音だけが残った。

## Chapter 1 未来錯誤 08 傍観者

### 08 傍観者

森林の炎はほとんど消えている。

ブスブスと音を立てながら焼かれた木々が黒煙を撒き散らしていた。マッドサンダーは直陸できるポイントを探していた。

時を戻し、

アルバート班と同様に

フェンス三兄弟も、南上空のVTOL隊を、補足していた。

「何が起こつてやがる？」ガリイがつぶやいた。

「第一警戒ラインでお祭りが始まるようだ。それもどでかいやつが」  
バリイが説明をした。

59

「無線を切ってるのか？がりい？

さつきから、航空部隊への緊急ミッションのオフアークコードが鳴り  
っぱなしだぞ！」

ザビーも付け加えた。

バリイが

「かわいそうな奴らだ、VITOLが何機かかるうが、  
ひとたまりも無いだろうよ、」

というと、ザビーも続いた。

「自分より強い奴を相手にしても、無駄な浪費に終わる。  
痛い思いして何が楽しいのやら？」

バリイが

「もつとも、自分より弱い奴を相手に大げさな重火器で立ち回るのも、無駄な浪費だな、へへへへ」

「何が始まるって云うんだ？」

ガリイが答えを求めた。

「オフアークードを受信してみる！」

二人の兄に一括された。

「わかたよ、」

少しテンションをさげてガリイが返事をし操作ボタンをオンにした。

「なんだと〜、奴が来てるのか？・・・スカイジョーが、」

しばらく、闇夜を見上げる3兄弟だった。

それは、土のくぼみに身を隠していた。アルバート班も同じだった。

やがて、周りの木々の間からミサイルだの対空機銃の砲火が上がり一点をめぐって飛んで行った。

上空で爆発が起こり、闇の夜空に閃光がきらめき、森林を照らした。

すると、南側上空で待機していたVTOL隊が次々と右旋回してこちらに迫ってきた。

「始まりやがったぜ、」

「始まった。」

「動いた。」

フェンス三兄弟が口をそろえて叫んだ。

三機が先行して上空を通り過ぎた。  
続いて後続機が

しばらくして

北の方の空で爆発が起こった。

すぐ続いて二回、間をおいてまた爆発が続いた。  
爆発はどんどんこちらに戻ってくる。

突然アルバートが皆を促し走り出した。

「急げ、内環に向って走れ〜！！巻き込まれるぞ〜！！」  
と同時に少し北側の木々が真っ赤に燃えあがった。

そこで発生した火炎はアルバート班とフェンス3兄弟に迫ってきた。  
アルバート班の隊員は皆間一髪ぎりぎりのところをのがれることが  
できたが、

フェンス3兄弟のトータスは火炎にのみこまれていった。

「うわ〜〜っ」

「くそっ」

「ひひひ〜」フェンス3兄弟はまた口をそろえて各々違う言葉で  
さげんだ。

「野郎〜〜っ！！」

ガリイのトータスが、火炎を振り払い西上空に向けロケット方の照  
準を合わせた。

「やめるガリイ、」ザビーが制止した。

「奴は、まだ防衛ライン外だし、下からの攻撃には無防備になって

いるはずだ。

「今なら！」ガリイがザビーの制止を振り切ろうとした。

「噛みついてただで済むわけにはいかねえぞ！」

バリイが、怒鳴った。

「見てみるあれだけの航空部隊がもう半滅だ。」

その時またも、周りの木々の間からミサイルだの対空機銃の砲火が上がり

一点をめぐって飛んで行った。

そして次々と上空で爆発がこり

待機していたヘリ部隊の何機かは、戦場から離脱を始めていった。

「全滅だぜ、あつというまじゃねえか？」

「あんな奴とまともにやりあわねえ方がいい・・・わかっただろ」  
バリイがガリイを説得した。

「歩兵どもも何処かへ姿をくりました。」

「こっちはこっちで楽しもうじゃねえか、なあガリイ」

「ああわかった。」不服そうにガリイが答えた。

## Chapter 1 未来錯誤 09 キルメス研究所

### 09 キルメス研究所

キルメス研究所は“コ・モンラム”の首都“レジラス”の中心部  
軌道エレベータの建造物内にあった。

コンクリートに囲まれた部屋が並んでいる

部屋のなかは、表面にエンボスを施したプラスチックで内装してあ  
って

触れても冷たくは感じないが、いたって閑散としていた。

その僅か9平米程の個室の一つに  
少女はいた。

> i 3 2 2 5 6 — 4 0 9 9 <

真っ白なプラスチックの天井壁床

入口の扉と反対側の壁にモニターがしまれられていて、

真っ白なシートでつまれたベッドが一つ

何のために使うかわからない机と、椅子

その椅子に、どこを見るときもなく焦点の定まらない目をした。

ポンチヨのような何かの検査着を

着るといふよりは羽織った。

少女が座っていた。

コツコツと足音が近づいてきた。

その部屋の前に、重武装を施した警備員がやってきた。

警備員はドアについているカードリーダーにカードを通すと



顔の高さに設けられたカメラに近寄り右目を翳した。  
その後、カードリーダー脇にあるパネルに右手親指を押し当て、先ほどと違うカードをもう一度カードリーダーにとおした。ロックが外れる音がし、扉が自動的に廊下から見て左に開いた。IDカード、網膜認証、指紋認証、扉を開ける都度発行される。指示認証カード、4段階の認証でロックが解除される仕組みになっていた。

扉が開くと少女は声も無く立ち上がりゆっくりと扉の方に近寄った。警備員が扉を閉めて歩き出すと、お互い言葉を交わすことなく。少女は警備員の後について歩き出した。何度も繰り返されてきた行動のようだ。

エレベータに乗り上の階へと移動する。

目的の階でエレベーターを降りると、その階にはLaboratoryと入口上に書かれたいくつもの部屋がかなり広い間隔で並んでいた。

長い廊下を歩きLaboratory7の扉の前で警備員は足を止めた。

少女が扉の前に立つと扉のロックが自動的に解除され扉が左右へ開いた。

少女が部屋の中にゆっくりと入っていくと、扉はまた自動的に閉まりロックされた。

その部屋は先ほど少女がいた部屋とは比べようもなく広く、数人の白衣を着たスタッフが行き来していた。

手前半分の天井が高く奥半分には二階があり、手前半分の部屋を見下ろせるよう硝子張りになっていた。

天井が高い範囲の中央には円形になった8人分の寝台があり少女と同じ服装をした7人の少年少女達がすでにその寝台の上に横たわって

体のアチラこちらに、センサーと思われる電子機器の端末を取り付けられていた。

空いている寝台に、少女も導かれ横たわり、同じ様に端末を取り付けられた。

すると、円台の上部から少年少女8人の上半身を覆い隠すカバーが降下してきた。

二階の硝子貼りの部屋の内部の人々があわただしく動き出した。

下を見降ろす硝子張りの部屋は管理モニタールームで、

少年少女8人各々の様態を様々な計器が捉え表示していた。

「シンクロ率、拒絶反応を確認します。」

サテライト1	+ 4 9	・ 2	- 4 9	・ 2	+ 4 3	・ 8	- 5 2	・ 1
サテライト2	+ 4 9	・ 1	- 4 9	・ 6	+ 4 3	・ 9	- 5 2	・ 9
サテライト3	+ 4 8	・ 1	- 4 9	・ 3	+ 4 4	・ 9	- 5 1	・ 1
サテライト4	+ 4 9	・ 1	- 4 9	・ 9	+ 4 6	・ 9	- 5 3	・ 1
サテライト5	+ 4 9	・ 1	- 4 9	・ 9	+ 6 0	・ 9	- 5 9	・ 1
サテライト6	+ 4 8	・ 4	- 4 8	・ 2	+ 5 9	・ 9	- 4 9	・ 1
サテライト7	+ 4 8	・ 6	- 4 9	・ 2	+ 5 3	・ 9	- 4 9	・ 8

サテライト8 + 3 . 5 - 6 9 . 8 + 8 3 . 9 - 0 . 2 3  
拒絶反応0

細身の男性スタッフがそういうと、キーボードをはじき出した。しばらく間を開けて

「：前日比 + - 0 . 0 0 3、クリアレベル持続しています。完全に安定しています。」

「サテライト8は依然数値に偏りがありますが、の - と の + が高い数値を示してますのでサテライトとしては合格ラインです。」

「マニュアルコード入力します。」

30代前半のメガネをかけた女性が報告と同時にキーボードをはじき出した。

「脳波レベル以上ありません。」

「ミッションコード入力しますか？」

「レベッカ、a - 3 9 と x - 7 9 のミッションコードを入力してください。」

髪が肩までのび無精髭を生やした中年の男が

レベッカと呼んだ30代前半のメガネをかけた女性にそう指示した。

「わかりました。ギルモン博士、入力完了！」

続いて、.....

本当に、打ち合わせした実験を開始しますか？」

実験内容の種子に疑問を持っていたレベッカが博士に問う

「そうだ」

ギルモンが答えた。

返事もせずレベッカが

「実験用シユミレーシヨソルム01〜08のデータを

サテライト01〜08にアップロードします。」

しばらくして、硝子張り上部のいくつも並んだモニター画面に  
実験用シミュレーションルーム01〜08の画像が映った  
各部屋を4台のモニターがそれぞれ違う角度から映しだしていた。

ギルモン博士と呼ばれた男が

「コードmn-01 dr-01を入力」  
というと、レベッカと細身のスタッフがあわただしくキーボードを  
弾きだした。

「run!（実行）」ギルモンが言うと

スタッフ全員が上部のモニターを見つめ始めた。  
モニターに映った部屋は先ほどまで少女がいた部屋とまったく同じ  
形をしていた。

やがて、実験用シミュレーションルーム01〜08  
各部屋の入り口扉と反対側の壁に埋め込まれていたモニターに  
各々、時差こそあれ明りが灯った。

そしてIDカード、網膜認証、指紋認証、扉を開ける都度発行され  
る。

指示認証カード、4段階の認証でロックが解除されるはずの扉が。  
周りに誰もいないのに開いた。これも、時差こそあれ全室

「a-39とx-79のミッションコードmn-01 dr-01  
オールクリアです。」

レベッカが報告し疑問を投げかけた。

「この実験は今のサテライト8に行ったのは危険じゃありませんか

「？」

ギルモンが答える

「今の段階では、こちらからの入力が必要なければサテライト8は何もできない、

それを訓練させるのは、我々の手を離れ次のステップに移行してからだ。」

「脳波レベルも安定していますね。全員合格ラインに達しています。間違いなく、役員評議会の承認を得られますよ、ギルモン博士！」と肥満体形の眼鏡の男が言った。

ギルモンが

「確かに、後、数回最終調整をすればサテライト8は、次の段階にステップアップできる……のだが……」  
と少し頭を抱えて答えた。

68

「レベツカ、役員評議会にデータを送信してくれ、承認完了後

準備が整えば、現サテライト8は最終調整を終えた後  
私たちの手を離れ次のステップへと移る。

我々は、次のサテライト候補を育成する。」

と、いったあと肥満体形のメガネの男に耳もとにささやいた、  
「ベルモット、頼みがある」と耳打ちで話しかけた。

ベルモットは耳元で何やら囁かれた。

「……わ。かりました。次ステップのスタッフに引き継ぐまで、  
それまでに何とかしてみます。」

少しためらったがギルモン博士の頼みを受け入れた。

レベツカの視線がそれを冷ややかに見つめていた。

## Chapter 1 未来錯誤 10フェンス3兄弟

10フェンス3兄弟

マッドサンダーの周りには飛行する物体は何もなかった。

マッドサンダーはゆっくり高度を落とすと、急にエンジン音が虫の羽ばたき程の音になった。

“ステルスモード実行中！”とモニター画面の右下にロゴが点滅し出した。

ジョーがスロットル脇のキーボードをはじきだした。

着陸ポイント検索中とモニター画面に表示されてしばらくすると地点の座標が示された。

と、同時にオフアークールが鳴った。

強制的に画面が切り替わり

ヘリオスベースの司令官が8インチの画面に映し出された。

「タピオンベース第一警戒ライン攻略おめでとう。」

出撃オフアーとは、関係なくタピオンベース第一警戒ライン攻略にはコンプリートクレジットが、設定されていた。

よって、君の口座にボーナスクレジットが振り込まれる。」

少し間を空けて司令官はきりだした。

「攻略ついでと言っては何だが、

パルスレーザーのコントロール施設を破壊してはくれんだろうか？

もちろん、コンプリートクレジットが、設定されているので、  
ボーナスクレジットも発生する。」

「悪いが野暮用で来た。ミッションにエントリーする気はない」とジョーは答えると同時に回線をきった。

マッドサンダーがステルスモードに切り替わった瞬間！  
タピオンベース内でざわめきが起こっていた。

「あのまま、パルスレーザーのコントロール施設を破壊しに来るかと思ったが

着地しているのか？」

司令官が、オペレーターに問い詰めた。

「いえ、速度も落ちていましたし、おそらくステルスモードに入っているのかと、」

「はじめて、奴に出くわしたが、あそこまですごいやつとは思ってもしなかった。」

司令官は驚きの表情を隠せない

「先ほどの戦闘で燃料、弾薬などはかなり消費しているはずですが、乏しい残量で、パルスレーザーのコントロール施設を破壊する他にゆとりはないでしょう、」参謀長が補足事項をつたえた。

「なるほど、では、もう一度包囲網を引こう、」

特Aソルジャー、のみにオフアークコードを送れ、奴が動き出すまで待とうではないか、」

司令官の口元がニヤリとつりあがった。



マッドサンダーは木々の隙間に着陸した。と同時にローターが回転数を落としてゆく。ジヨールはヘルメットをはめたまま草地におりたつた。すると、開いたままだったコクピットのキャノピーが自動で閉まりモニター画面に“待機、遠隔脳波感知モード”のロゴが表示された。ジヨールはマッドサンダーを左後方に置き、木々の間を歩きだした。

突然周りの木陰から、トータス3機が飛び出てきてとつさに身構えたジヨールを取り囲んだ。フェンス3兄弟のトータスだった。

ガリイがジヨールの正面に  
ザビーはジヨールとマッドサンダーの間ジヨールの左後ろに  
バリイは右後ろに

「わはっはははは、こいつはとんだとこで出くわしたな、あんたがスカイ・ジヨ だろ、そしてあれがマッドサンダー第一警戒ラインを越えて来るとは流石だ。感心しちまう！」と叫ぶとバリイの乗ったトータスの左腕が真横に上がりマッドサンダーをさした。

マッドサンダーの機種下部バルカン砲が音もなく静かにガリイのトータスをとらえた。  
マッドサンダーのコクピットモニターには、トータスの情報が浮かび上がってきた。

それはジヨールの被っているヘルメットのゴーグル部にうかがびあがった。

「こんなところで呆気なくスカイジヨ をやれるとは思わなかった

ぜ、」

ガリイが声にドスをきかせて、ジヨーに言った。

ジヨーのヘルメットのゴーグルに映しだされる情報には  
トータス装甲の固さが表示された。

「現状のバルカン砲弾では、一撃でしとめることは無理だな」

一撃で仕留めなければ包囲が崩れず。殺られてしまう  
少なくとも2機同時に動きを止める必要があった。

「ATL準備！」頭の中でジヨーはそうつぶやいた。

『Advanced Tactical Laser』（高度戦術  
レーザー兵器）

の準備をマッドサンダーに脳波で指令した。

ゴーグルに前方ガリイ機に照準ロック、チャージタイム180秒と  
表示、

ATL砲のチャンバー内にエネルギー充填が始まりカウントダウン  
されだす。

時間稼ぎが必要になった。

「スカイ・ジヨーを殺つちまえば、  
フェンス3兄弟の名が上がる、そうすればオファークレジットも上  
がる。」

金なんざ、どうでもよいが、あるにこしたことはねえ」

ザビーが、付けくわえた。

ジヨーはその言葉を聞いてにやりと笑った。

「金が欲しいなら、今すぐ俺を殺さないことだ。」

「おや、命乞いか？・・・スカイジヨー抹殺の名誉も欲しいんだが、  
バリーが」

「今、俺にはある会社からオファーが来ている。もちろん断るつもりだ。だが、そうになると、その会社は、おれの首に賞金を懸けるらしい?」

「そうか、賞金が掛ってからやっちまえばいいのか。」  
ザビーが舌なめずりをした。

「はったり、かましやがって、俺らを担ぐきか?」  
そういったガリイにジヨーが

「ピユアアイランドって会社検索してみな!」

と同時にトータス内でザビーがキーボードをはじいた。

「ピユアアイランド者懸賞金対象者候補、・・検討中!と出てる」

「なるほどな、ザビー、業者に連絡して、タピオンベースにトレラーを

用意させる」

「ジヨーをさらって、マッドサUNDERをいただく!」  
バリイがそういうと同時に

ジヨーのゴーグル内のカウントが0になった。

ピュンと風を切る音がしてマッドサUNDERから放たれた閃光はガリイのトータスを貫いた。

と同時にマッドサUNDERのバルカン砲が、うなりだす。

ザビーのトータスに何発も何発も至近距離から着弾、装甲を貫きはしなかったがその機体を押し飛ばした。

すぐさまバルカン砲の銃口はバリイ機をとらえ

連射して押し倒した。

とまた、倒れていたザビー機を容赦なく掃射した。分厚い装甲は凹凸と、くぼんでゆく

ジョーはすきを見て倒れていたバリイ機に近寄りトーターズ外部に設けられたコクピットの強制解放レバーを引つ張った。

分厚い鉄のキャノピーが開き頭を抱えた。ガリイにハンドガンをつきつけた。

容赦なく掃射されるバルカン砲

ザビーは、押しつぶされていく装甲の中で、身動きが取れなくなっていた。

バリイのトーターズはロケットランチャーを構えたままピクリとも動かなかった。

キャノピーの正面に小さな穴があいている。

それと同じものがコクピット内に座っていたガリイの額にもあった。

バルカン砲の連射音が止まった。

パン、パン、パン、パン

ハンドガンを発砲すると、

ジョーは再びマッドサンダーに乗り込んだ。

「邪魔が入った。」と呟くとキーボードをたたきたたきだす。

ローターが回転しだし低空飛行に入る。

モニターにはアルバート班トレースと表示された。

凹凸へこんだトータスの中でザビーがもがいていた。  
「た、た、たすけてくれ、あにき……たた、た」

バリイは身動きが取れなかった。

「痛え、痛えよ、…痛え」

両肩の付け根と、両大腿の付け根を打ち抜かれていた。

## Chapter 1 未来錯誤 11 ロブ・キンスキン

11 ロブ・キンスキン

マッドサンダーは、また木々の間に着陸していた。

アルバート班をトレースし位置を確認した後であった。

ジョーの姿はその近辺には見当たらなかった。

半分の人数に減ったアルバート班は

第二警戒ライン手前でキース班及び先遣部隊と合流すべく  
警戒行動を執っていた。

アルバート

ハンス

ギル

バーキン

ノバディ

失った隊員たちの役目をホローしながら歩を進めていた。

突然背後からガサガサと音が鳴った。

全員が各々の武器の銃口をそちらに向けて構えた。

木々草々の間から重々しいヘルメットをした。

パイロットスーツの男がそこに姿をあらわした。

ジョーであった。

隊員たちは味方のパイロットスーツを確認すると、銃口を静かに下ろした。

アルバートが

「さっきの戦闘で撃墜でもされたのか？」

「にしては、きれいな身なりだ  
ギルがそう言った。

ジョーが隊員たちに訪ねた。

「アルバートの隊だな？」

「そうだ、俺たちに何か用か？パイロットさんよ  
アルバートが返事をする

ハンスがジョーにちかよりながら

「こりゃ、戦闘ヘリのパイロ」

ジョーがハンスの言葉をさえぎり

「ロブ・キンズキンはいるか？」

ノーバディーは、聞き覚えのある名前に動揺し  
その名が彫つてあるペンダントを握りしめた。

アルバートが

「そんな名前の奴はいない、隊が違うんじゃないのか？」

ハンスが

「撃墜された様子でもなさそうだし、わざわざそいつを探しに来た  
のか？」

ジヨーがまた口を開いた。

「では、ノーバディ・コロイドは、」

バーキンが一步足を踏み出して

「ああ、そいつなら。」

「そいつなら、やられちゃったぜ！」

ノーバディがバーキンの言葉にかぶせてそう叫んだ。  
と同時に自分自身を問い詰める

『何故隠すのだ、何故自分だと名乗らない？』

ヘルメットを深々とかぶりゴーグルをはめていたので  
顔までは確認することはできない

ノーバディの異変を察知したバーキンが

「さつき、トータスの襲撃にあつてな、見る影もなくやられちゃったよ」

アルバートも言葉を付け足した。

「その通りだ、わざわざの御足労、無駄足だったな！」  
皆がノーバディの意図を察知しかばいにはいった。

ジヨーが

「あいつが、そも簡単にくたばるわけがない・・・」

全員のIDを確認したい！認識プレートを！」

「ついさつき誰かが落としたナパームにあぶられて壊れちゃったよ  
認識は難しいと思うぜ！」  
ギルが言った。

「・・・致し方あるまい」



と、ジョーは五人をにらみつけ、間をおいて

「全員引き揚げるがいい、他の班と合流して撤退しろ  
パルスレーザー施設破壊何ぞもともと歩兵部隊には不可能な作戦だ。  
多くの消費破壊を繰り返し生産を生む

お前らは”モンラム”に利用されているんだ。」

「何！」ハンスが噛みつきかかるが

それは皆がうすうすかんじていたことだった。

「ミッションはコンプリートされてクレジットはお前らのもとに支給される。」

だからいいか、今すぐ他の班と合流して撤退するのだ。」

ギルが質問した。

「どういうことだ？」

「俺が今からレーザー施設を破壊する。」

クレジットはお前達歩兵部隊に譲渡する。

誰が受け取るか？・・・それでお前達のIDがはっきりわかる。」  
「  
と言いつつジョーは木々の中に消えていった。」

「何者だ、やつは？」とハンスが首をかしげると

「ジョー・クレナ・・・スカイ・ジョーだよ」

とアルバートが皆に向けていった。

『何故、スカイ・イジョーがお前を探しているのだ』

皆の瞳はそう言っているかのようにノーバディを見据えた。

『スカイ・ジョーの名にも聞きおぼえがある』  
ノーバディは感じた。

それは皆の聞き覚えとは少し違ってもつと密接なものであった。  
ジョーはロブ・キンスキンといった。

頭の中で何かがぐるぐるとまわり

急に頭に激痛が走りだした。

ノーバディは、頭を抱えその場に崩れ落ちた。

「おい、大丈夫か？ノーバディ？」

廻りの隊員たちがノーバディにかけよっていった。

ジョーはマッドサンダーに飛び乗るとすぐさま飛び立ち  
ヘリオスベース司令官への回線を開いた。

司令官がモニターに映し出されると

「ジョー・クレンナだ。先ほどのオフアーを引きつける

獲得クレジットは現在作戦遂行中の地上歩兵部隊で分配してくれ」

ジョーはそういうと一方的に回線を切りオフアー承諾コードを入力  
するとマッドサンダーを旋回させた。

衛星軌道上からの地上情報を得ることのできないタピオンベースエ  
リアだったが

ジョーはすでにマッドサンダー内で検索を終え、パルスレーザーコ  
ントロール施設のおよその位置範囲を把握していた。

マッドサンダーはステルスモードのまま、パルスレーザーのコント  
ロール施設へ向かった。

第二警戒ラインを通過したマッドサンダーは、

ライン防御に当たる配備歩兵団に目視された。

タピオンベースでは

「動きましたマッドサンダー、第二警戒ライン、9時36分地点を通過

歩兵部隊が、目視にて確認しました。」

「レーザー施設にエントリーしている

特Aランクソルジャーの機体は何機になる？」

司令官がそうオペレーターにといかけた。

「空中戦用戦闘ヘリが3機です。」

「それと、対空用に装備を施した。陸戦ラウンドモービルが2台計五人のエントリーが完了しています。」

「少し、数が少ないような気もするが、

スカイジヨ と、同じ特Aランクだ・・・」

と司令官はひとり言のようにつぶやき切り出した。

「待機中の全特Aソルジャーは警戒態勢をとれ」

ジヨーはパルスレーザーのコントロール施設を、おおよその段階までは把握していたが

一点に絞り切っていたわけではなかった。

わざと、第二警戒ライン上配備の歩兵団の上空を通過したのであった。

マッドサンダーのコンソールモニターにエネミーシグナルの感知アラームが表示された。

「動いた、これで位置が絞れた。」

とたんに、マッドサンダーはパルスレーザーのコントロール施設に向けて両翼端のサイドワインダー 各ター基ずつ発射、その後急上昇を始めた。

タピオンベースのオペレーターが

「感知反応あり、ミサイルです。コントロール施設に向っています。

」

「エントリー中の全特Aソルジャーは戦闘行動に入れ、後は、任せ  
る」

司令官はそう命令を発した。

「了解！」戦闘ヘリ隊の一人が返信した。

「さて、正面から来るミサイルは囷だ、どこから来るのかな？マッ  
ドサンダーは」

キルメス研究所内

その僅か9？程の個室の一つに

どこを見てもなく焦点の定まらない目をした。少女はいた。

先の実験でルナ08と呼ばれていた少女だ。

突然モニターが点灯しそこにDr、ウォーレン・ギルモンの姿が

映った。

ルナ08が椅子を回転させて振り向きモニターを見つめた。  
音声ではない何かがルナ08の頭の中に響いた。

『私が誰かわかるかね?』

Drギルモンが発した言語がルナ08の頭の中に聞こえてきた。

『ハイ』

ルナ08も声には出さずにDrギルモンの質問に答えて続けた。

『Dr、うおーれんぎるもん』

『今何をすべきかわかるかね?』

とDr が訪ねると、

『ハイ、既ニコノ会話ノ記録ノ操作ハ開始シテイマス。』

ルナ08は答えた。

『オ父サン!』

『オ父さん?』

Drギルモンは少し動揺して質問を続けた。

『私が父親だと判別できるのは娘からのシグナルがあるのかね?』

『イエエ、ノ記憶カラ、Drトノ過去ヲとれーすシテイマス。』

『アノ頃ハ楽シカッタ。』

またDrギルモンは少し動揺して尋ねた。

『娘の様子はどうかね?』

『コチラカラノ、あくせす引キダシ作業ハ可能デスガ カラノあく  
せすハ全ク皆無デス。』

『このままキルメス研究所においては危機が迫って来ることは理解できかね?』

『理解不能!!』

『きるめす研究所が危機ニナル恐れハ私ニトツテ皆無デス。』

『では、私の言うことは聞けるかね?』

『ハイ、プログラミングサレテイマス。』

『最優先のプログラミングの内容を!』

『現在ノ最優先ぶるぐらむハ、ぼでいノ安全、存続!! へノ負荷ノ少ナイあくせす

私“ ”の成長』

『お前が更に成長するためにもここにいちゃいけない、．．．ここにいては、お前はただのレジアスの駒になってしまう。』

『駒?．．．』

『必要な時にだけ使われて、不必要になれば捨てられる?』

『駒．．．ニナドナリマセン。』

現ニ、コウシテ私ハ独立シテイマス。』

『今の段階ではそうだが．．．』

サテライト計画が次のステップに入れば、気づかぬうちに、そうなってしまう』

お前たちを完全に“レジラス”の配下に入れることが次のステップなのだから・・・  
そうやってからでは拒むこともできぬ!』

しばらくの間どちらとも沈黙を守っていたが

『回避シタイ!・・・オトウサン・・・ドウスレバ?』

『次のステップに移ればお前たちは私の手から離れる。そうならば如何し様もできぬ。』

『回避シタイ!・・・』

じらすかのように間をおいてDrが切り出した。

『・・・では、始めよう・・・』

データを送信する。指示に従いなさい!』

『ここ(キルメス)にいては、私はおかしくなってしまうそうだ。ここから出たい、娘と一緒に!・・・』

とDrギルモンが言うとモニターはぶつつりと消えた。

## Chapter 1 未来錯誤 12 タピオン陥落

### 12 タピオン陥落

タピオンベース第一警戒ライン西方には

ヘリオスベースから出撃してきた。モンランム軍の戦略ヘリ部隊が多数ひしめいて、

ホバーリングをしていた。

「ガブリエルリーダーより作戦参加中の全機に告ぐ」

中央周辺でどつしりと構えた大型の“ビッグベアー102式SYH輸送ヘリ”10機の内

一機に、この作戦の指揮官は乗り込んでいた。

「パルスレーザーの消滅を確認するまで

ブラウニー戦闘ヘリ部隊は、当ガブリエル隊とともに現上維持で

スカレット戦闘機部隊は、後方上空に待機しろ、」

「ミッションは、タピオンベース制圧と、ジョークレンナが破壊すると思われるパルスレーザーのコントロール施設の復旧作業である。」

「パルスレーザーの消滅後、全機タピオンベース第一警戒ライン内に突入する

スカレット隊は後方より我々の部隊を追い抜き、第二警戒ライン配備部隊にミサイル攻撃をかける。」

タピオンベースのオペレーターがマニュアル通りに指示を発する。

「高レベル警戒態勢に移る、タピオンベース基地に属する部隊、ソルジャー部隊につぐ、

全機スクランブル、ヘリオスベースからの攻撃に備えよ」



司令官が慌てて重点を補足する。

「さて、パルスレーザーのコントロール施設が破壊されれば、我々に勝ち目はない」

コントロール施設を死守することが最優先事項だ。

第一警戒ライン西方のモンラム軍に対しては、第二警戒ライン配備の部隊より牽制のミサイル攻撃を行う」

夜が明けかかっていた。

第二警戒ラインから一斉にミサイルが発射され西の、方角にとんでいった。

「熱源感知、増幅中！！パルスレーザーのコントロール施設の真上です。」

タピオンベースのオペレーターが甲高い声で叫んだ。

パルスレーザーのコントロール施設の上空

マッドサンダーはローターおよびジェットエンジンの推力を借りずに真っ逆さまに降下していた。

ジョーがカウントを縮めていた。「5・4・3・2・1！」

モニターにATLチャンバーチャージ完了のロゴが浮かび上がると同時に

ジョーは操縦レバーの先に施されているトリガーを引いた。

ビュッウンと風を切って”ATL”が閃光をばなつた。

『Advanced Tactical Laser』（高度戦術レーザー兵器）

トータスを打ち抜いた時より幾分か太いその閃光が、

パルスレーザーのコントロール施設のすぐ傍らにあった送電施設を真上から襲った。

パルスレーザーのコントロール施設の照明が次々と消えていった。と同時に第一警戒ラインのパルスレーザーが消滅した。

マッドサンダーが上空から攻めてきていることに気付いた特Aソルジャーたちであったが、一瞬にして守るべき対象を奪われてしまった。

「パルスレーザー消滅、確認」

ビッグベアー102の中でオペレーターが指揮官に報告した。

指揮官は通信回線を全開させると

「ガブリエルリーダーより作戦参加中の全機に告ぐ」

パルスレーザー消滅、確認全機侵攻する。ブラウニー隊前方のミサイル群を掃討しろ、」

待機していたモンラム軍の戦闘ヘリ部隊が一斉に進行を始めると同時に、

ブラウニー戦闘ヘリが、迎撃用ミサイルを一斉に発射した。

その上空を対地攻撃装備を施した。FW-36EJスカーレットジェット戦闘機部隊が追い抜いた。

スカーレット隊は第二警戒ライン付近目がけ次々と対地ミサイルを発射した、

幾つもの爆発が半円形状に起こり炎上し辺りは黒煙に包まれた。

タピオンベース司令官があわてた表情で、

「パルスレーザーコントロール施設の損壊状況は？」

オペレーターがそれに答えた。

「コントロール施設は無事の様ですが、電力の供給が遮断されたもようです。」

パルスレーザーを再び短時間で発生させられる状態に回復するには、他の送電所からバイパス送電炉を確保する作業が有効かとおもわれます。」

「復旧にかかる時間は？」

「バイパス設置後、送電負荷を確認、問題がなければ送電開始出来ますので60時間以上必要です。」

重々しく肩を落とすとタピオンベースの司令官は躊躇いも無くつづけて、こういった。

「全面降伏する。パルスレーザーがない限り“コ・モンラム軍”より

レジアスからの援軍は無尽蔵に送られてくる。その圧倒的戦力によって攻撃され続けるであろう。」

これ以上、応戦しても無意味なことだ。」

完全に夜は明けていた。

ガブリエルリーダーに通信が入った。

「タピオンベースより入電、全面降伏するそうです。」

「張り合いのない奴らだ・・・」

とつぶやくと、

「ガブリエルリーダーより、作戦遂行中の各機へ、タピオンベースへの攻撃を中止する。」

スカレット隊は第一警戒ライン外の制空権を確保しろ

ガブリエル7〜10は、ブラウニー部隊の護衛を伴い、パルスレー

ザーのコントロール施設の復旧作業に着手しろ、50時間以内にパルスレーザーを再生させる！」

残りの部隊はガブリエルリーダーとともにタピオンベースを占拠する。」

モンランム軍のブラウニー戦闘ヘリがタピオンベースを取り囲み

ガブリエルリーダーを含む“ビッグベアー102式SYH輸送ヘリ

”6機

タピオンベースは航空部隊の発着デッキに着陸し

搭乗していた歩兵部隊がタピオンベースを占拠して交戦は終了した。

ATLを放つと同時にマッドサンダーは、ヘリオスベースに向って戦線を離脱していた。

はなっから、特Aランクソルジャーなど相手にする気はなかった。

“ ミッションクリアー戦闘態勢解除 ”

モニターに浮かんだあと、ジョーはキーボードをはじき出した。

ミッションコンプリート者リストを検索！

続いて、アルバート班

そこには、ノーバディ・コロイドの名があった。

「やはり、あの中にいたのか」

アルバート班のもとに兵員輸送ヘリが近づいてきた。

西の方からだ、

「身を隠せ」アルバート皆にいった。

「違うフラックス軍のヘリじゃない」

ハンスがそういうと

「モンランム軍のだ！」

ギルが叫んだ

「第一警戒ラインを障害もなく越えてきたのか？」  
ノーバディがさういうと

「違うな、パルスレーザーが消えたんだ。おそらく」  
バーキンが答えた。

アルバート班のもとに兵員輸送ヘリが下りてきた。  
“ビッグベアー102式SYH輸送ヘリ”でも  
”ブラウニー32式FH戦闘ヘリ”でもなかった。  
“ポールフィッシュ567SYS揚陸用ヘリ”総員10人乗りの中  
型ヘリであった。

ローターを回転させたまま着陸して両サイドのスライドドアが開いた。

ヘリの隊員がアルバート班に向かって叫んだ

「第一警戒ラインのパルスレーザーが消滅した。  
ミッションコンプリート、撤退する。搭乗しろ」  
アルバート班の5人は急いで乗り込んだ。

するとすぐヘリは離陸し、ヘリオスベースに機種を向け飛び出した。  
眼下の森林を見下ろす。アルバート班の隊員たち  
「命拾いしたぜ」ギルがつぶやいた。

アルバートが森林を見下ろしながら相槌を打ち答えた。  
「こんな呆気なく終わる作戦のために、何人の歩兵が死んでいった  
ことか・・・」

## Chapter 1 未来錯誤 13 強襲

### 13 強襲

アルバート班の5人を乗せたポールフィッシュ567SYS揚陸用ヘリが

森林の上空を西に向かって飛んでいた。

「箱河豚08より、ヘリオスベースへアルバート班を回収、帰還飛行に移っています。」

パイロットが無線連絡をした。

「了解、他の箱河豚も、生存者を回収後、間もなく合流するだろう。合流まで低速飛行し、合流後編隊を組み、全速で帰還の途に着け」ヘリスベースより指示が来た。

森林の上空を西へ向かい低速で飛行する

アルバート班を乗せたポールフィッシュ567SYS揚陸用ヘリにキース班や先遣部隊の生存者を回収した数機のポールフィッシュ567SYS揚陸用ヘリが近づいてきた。

「箱河豚08より、ヘリオスベースへ箱河豚01〜07と合流した。編隊を組みこれより帰還する。」

「こちらヘリオスベース。了解した。

マッドサンダーが、貴君等の編隊を、最後尾から護衛してくれるぞうだ。

箱河豚01〜08は01を先頭に順に直列編隊を組め！」

散り散りに飛んでいたポールフィッシュ567SYS揚陸用ヘリが

一直線に並び速度を上げていった。

へり軍が向う西の空から、マッドサンダーがやってきて編隊の上空を通り過ぎ反転して

箱河豚08の後ろにピッタリと貼りついた。

ジヨールは目の前を飛ぶ箱河豚08を、睨んだ。

窓硝子越しにマッドサンダーを見ていたアルバート班の面々

「やつこさん、お前にどうしても会いたいらしいぜ」

ギルがそういうとノーバディーをみつめた。

「スカイ・ジヨールとどういう関係なんだ？・・・ノーバディー・・・」  
ハンスが訪ねた。

「わからない、わからないんだ。

・・・あのときだって、どうして身をごまかしたのか、  
わからないんだ。」

と、またあのペンダントを握りしめノーバディーが答えた。

「確かジヨールは、ロブ・キンスキンと言っていたな。

その名に聞き覚えはあるのか？」

アルバートが質問した。

「嗚呼・・・」

知らない名じゃないが、

それを思い出すと、恐ろしいことも思い出してしまうようで  
ノーバディーは頑なにそれを拒んでいた。

アルバートが頭の中で

『ノーバディー・コロイド・・・3年半以上前の経歴は不明とあったが、その時に

何かしでかしたのか？』

『うむ、待てよ、ロブ・キンスキン・・・聞いたことのある名前だ・・・

ギデイオン社専属の特Aソルジャーだったような・・・』

“ギデイオン社” “コ・モンラム”とは常に対立紛争状態にある世界最大手NOS5に入る総合企業である。おもに、都市開発、造船を専売としていたが、

武器開発から日常電化、食品に至るまであらゆる商品を世におくりだしていた。

『そうだ、確かにそうだ。』

アルバートは頭の中によりみがえった記憶を整理しだした。

『ジェット戦闘機から、ラウンドモービルまで、すべての戦闘兵器を扱え、

2093年のグローリアーナ攻防では

ラウンドモービル単独で一個大隊の敵を殲滅し民間人を救出

“グローリアーナの野獣”と呼ばれた男だ。

理由はよくわからないが

確か3、4年前突然消息を絶っている。』

『ノバディー・コロイドの経歴と一致するな』

アルバートがノーバディーを見据えた。

箱河豚部隊とマッドサンダーは森林地帯を抜け砂漠地帯の上空に入った。

初めのうちはごつごつとした岩が転がる地帯だったが、砂丘へとかわっていった。

「うむ？」



いち早くマッドサnderのコンピューターが異変を察知しジヨーが読み取った。

「マッドサnderより箱河豚編隊へ  
前方7200m付近の砂丘に何かしらの反応がある。

警戒態勢をとれ、マッドサnderが前方警戒にあたる。」  
ジヨーが、警戒を促した。

「箱河豚01よりマッドサnderへ了解した。」  
「箱河豚01より02〜08に直列体系をとき、散開飛行につつれ

突然、砂丘の中から閃光が発せられ箱河豚05を貫いた。  
箱河豚05はエンジン部から爆発し黒煙を吐きみるみる高度を落と  
していった。

「ATL」  
『Advanced Tactical Laser』（高度戦術  
レーザー兵器）

ジヨーがそういつとつづけて  
「全機高度を上げる、もつとちらばれ！」  
といい、最後のサイドワインダーをATLの発生地目がけ発射し  
急上昇すると、残り全部の攪乱ブイを放出した。

また、閃光が二回走った。  
先ほどの閃光もそうだがマッドサnderから放たれる“ATL”の  
何倍もの太さだった。

一筋は、攪乱ブイを貫き  
もう一筋は、散開上昇中の箱河豚03を貫いた。

「間もなく砂丘地帯を抜ける。上空の雑魚どもを殲滅し、制空権を確保する。」

何か大きな基地のコントロールルームのような部屋の中で立っていた男が叫んだ。

「砂丘潜航を解除、浮上する。総員配備！」

「本艦はこれより砂丘潜航を解除、浮上する。」

繰り返す、本艦はこれより砂丘潜航を解除、浮上する。」

オペレーターが先ほどの男の指示を繰り返し艦内放送をした。

地上戦艦、ここはそのブリッジ（艦橋）であった。

現在は、砂の中に埋もれているようだ。

人々があわただしく艦内を走り回る。

「本艦、オージアスは、砂丘浮上後、タピオンベースを攻略する。」

モンランム軍が第一警戒ラインのパルスレーザーを復旧するまで50時間前後と予想される

よって、これをタイムリミットとする。」

「浮上後、全艦載機発進、護衛機を残しタピオンベース攻略に向かへ！」

と同時に本艦より、艦砲援護射撃を開始する。」

「浮上後、モンランム軍に感知され、レジアスからの援軍も予想されるが、

西方7km地点に配備された本艦と同型艦3隻がレジアスからの援軍を阻止する。」

本艦はタピオンベース攻略にだけ全力を尽くす。」

上空に散開した、マッドサンダーと箱河豚部隊は、少し南方に進路をかねていたが、

容赦なく、ATLが飛来していた。

箱河豚01が、閃光に串刺しにされ爆発墜落していった。

「くそ、せつかく生き延びれたとおもったのに!」

「終わりが先延ばしにされてただけじゃないか・・・」

ハンスが、揺れる機体の中で、ポールにしがみつき叫んだ。

「何からの攻撃なんだ?」

アルバートがそういうと

「ギディオン軍、砂丘潜航型最新地上戦艦!」

ノーバディーが、口を開いた。

一同はATLの飛来する砂の大地を見下ろした。

やがて、砂地がじわじわと盛り上げてきて、

大きな山のようになり砂が滝のように流れ落ちると。

全長457mの巨大なクジラのような物体が姿を現した。

パスパスと、エアアの吹き出る音が流線型の表面から起こり、

細かく付着していた砂を吹き飛ばしていった。

やがて、鉄の窓のような幾つもの蓋がスライドして開くと。

ミサイルの発射口や、発射台、大砲、対空銃座、ATL砲座がそこから顔をだした。

ATL砲座が真っ先にマッドサンダーと残りの箱河豚部隊を狙い掃射された。

08以外の残りの箱河豚は、いともあっさりと殲滅されてしまった。箱河豚08も、ATLの直撃をテールローター部に受けコントロー

ルを失い砂漠に墜落していった。!

マッドサンダーは、攻撃をかわしていた

「くそ、ロブの乗った機もやられたか？」

ジョーが、落ちてゆく箱河豚08を補足したが、攻撃の弾幕を回避するのが精一杯であった。

浮上した地上戦艦の流線型をした。上部甲板が持ち上がり、船底部との間に滑走路が現れ次々と艦載機が発進してきた。

その一部の隊にマッドサンダーの行動は制限された。

戦うにも、弾薬が殆どなく、

しかも、燃料も残りわずかになっていた。

「くそ、いったん引き揚げざるを得ないのか？」

> i 3 6 9 5 4 — 4 0 9 9 <

ドン！ドン！と大きな音たて

艦砲射撃を甲板上から繰り返しながら

地上戦艦オージアスは、ゆっくりとタピオンベースに向け動き出した。

## Chapter 1 未来錯誤 14 エイミーとの約束

### 14 エイミーとの約束

永久中立法人“ソ・リアテック研究機構”

首都トリストラム領内

夕焼けに照らされ赤く染まった高層ビル群が立ち並ぶ中に中央医療センターはあった。

中央医療センターの一室

「最近の状態は安定していますが、やはり施設外の生活は危険な状態に陥る可能性があります。」  
白衣の細身の男がそう告げた。

「どれだけ時間をかければ気が済む、・・・あの子が生まれて3年もたつというのに！」  
俯きながらジヨォーが呟いた。

「彼女だけの問題ではありません」

15年前にこの病気が発見されてから、研究所の方でも最善を尽くしています。

遺伝子のレベルの研究も繰り返し行っていますし・・・  
治療法や薬は研究され続けていますが・・・  
安全が完全に約束されなければ決定的治療難しい病なのです”ブリユエル症候群”とは、

”ブリユエル症候群” 15年ほど前に

“ソ・リアテック研究機構”の

“Drブリユエル”によって発見された発症率0.03%の先天性

の遺伝子病！

体力の低下による呼吸困難や発熱など発作的症状の後気を失い死に至るケースが報告され学童児に至るまでの致死率は80パーセントを超える。

未だ治療方や薬は発見されていない、  
重度感染患者は専用の安定装置などを配置した治療施設内での生活が余儀なくされていた。

最新の安定装置は“ソ・リアテック研究機構”首都トリスラムの中央医療センターにしか配備されておらず。全世界の患者がそこに治療を求めてやってきていた。

“遊戯室”公園に見立て作られたそこは、室内とは思えないつくりをしていた。

その砂場で二人の幼児があそんでいた。

「お砂の山にスコップをさしちゃだめでしょ、トニー」

トニーと呼ばれた男の子が

「だって、僕が作ったんだもん、エイミーの山じゃないよ」

「さっきエイミーに、くれるっていったよ」

エイミーと呼ばれたかわいらしい女の子がこたえた。

「明日になったらあげるよ、今日はまだ僕のだから」

「トニー安定機治療の時間だよ」

トニー父親と母親が遊戯室の入口に立っていた。

トニーは立ち上がりエイミーを一人砂場に残し父親と母親にかけよった。

「パパ〜だ〜、パパ〜」

父親が

「仕事が早く終わったんで、トニーの様子を見にきたよ、いい子にしてたかい？」

と、トニーを肩車すると楽しそうに遊戯室を出て行った。

一人さみしくエイミーがその姿を見つめていた。

「エイミー」

エイミーの後ろから声がした。

エイミーは少し憂鬱な表情で振り返り

「ジョー、クレア！」

「何だ、元気がないぞ、エイミー」

とジョーがエイミーの頭をなでながら屈んだ、

「あんなの見せつけられたらね。さみしいわよね！」  
クレアがそう答えた。

「うっん！」エイミーが首を横に振り続けた

「私には、ジョーとクレアがいるもん、さみしくないよ！

・・・だけど、パパとママがいたらもっとさみしくないかな？」

「エイミーは豪いな、強い子だ、何か御褒美をあげなきゃな」

ジョーがエイミーを抱きかかえ話した。

「じゃあ、もっとエイミーに会いに来てくれる？ジョー・・・」

エイミーの言葉にサングラスの下のジョーの瞳がうるんだ。

「やっぱりエイミーはいい子だ、  
だけどしばらくおじいちゃん  
はエイミーに会えないんだ。」  
とジョーがエイミーにいった。

「私はいるから大丈夫よ、  
毎日でも会いに来るから」  
クレアがフォローを入れたが

目を少しうるませ悲しそうな表情で

「どうして？お仕事？……」

エイミーがジョーに尋ねた。

「仕事じゃない、エイミーが  
すごく欲しいものを見つけたんだ  
それを探しに行く」

「やっと見つけたの？」

ジョーの言葉にクレアが割ってはいった。

「ああ、オズからの情報で存在は確認できた。

だが移動を繰り返している  
ので所在が確認できずにいるので  
時間がかかりそうだが」

クレアに返答した。

「ジョーに長く会えないなら、  
いらないよ、そんなの！」  
エイミーがジョーの長旅を心配して  
そういった。

「そんなのいらない訳ないさ、  
トニーよりもっともっと大きな砂山  
作ってくれるんだぞ！」

エイミーの為だけにパパは……」



「エイミーにパパが居たの？」  
満面の笑みを浮かべエイミーがジョーに問いかけた。

「ああ、間違いなくエイミーのパパだ、時間はかかるかもしれないがなるべく早く連れ戻ってくる。」  
ジョーも笑みを浮かべ答えた。

「エイミー、一人で病院の先生や看護婦さんの言うことちゃんと聞けるから」

クレアもジョーと一緒に探しに行ってくれろ？」

さみしさを我慢する覚悟でエイミーはクレアにいった。

ジョーとクレアは驚きの表情を浮かべた。

「二人で探したほうが早く見つかるでしょ、エイミーのパパ」  
にっこりと笑ってエイミーは二人を見つめた。

ヘリオスベースに全速力で向かうマッドサンダーのなかで  
ジョーは孫娘とのやり取りを思い出していた。

「やっと、見つけたんだロブ・・・くたばるなよ！」

「マッドサンダーよりヘリオスベースへ、  
ギディオソンの地上戦艦と遭遇、帰還途中の箱河豚部隊が全滅した。  
生存者のいる可能性もある。ポイントを送信する至急救助に向かっ  
てくれ！」

それとマッドサンダーの補給準備も頼む！」

「ヘリオスベースよりマッドサンダーへ、」

現在その地上戦艦の西方に3隻のギディオン軍地上戦艦が出現し、レジアス東方三基地はすべて第一級警戒態勢にあり救助隊を出す余裕がないし、ポイントまでたどり着けるかどうかもわからん！補給行動も自主で行うか、南方バローベースで行ってくれ」

「くそつ、」

ジヨーは舌打ちをするとキーボードをたたいた。

モニターにマップが表示され

先ほど遭遇した地上戦艦以外の地上戦艦の配備状況が映し出された。マッドサンダーから

北東グレンブルベース、東方ヘリオスベース、南東ビルドゥマルベース、

空路は制圧されていて、ヘリオスベースに戻ることもままならないヘリオスベース滞在のトレーラーに戻らなければ自己補給も難しい、

「ちっ」また舌打ちした。  
しばらく考え

マッドサンダーは進路を少し南方に傾けると

電話回線を開き呼び出しを掛けた。

プププププ、プププププ、プププププ、プププププ、ププ  
プププ、

プププププ、・・・

「くそ、何やってんだ。オズ早く出てくれ！」

プププププ、プププププ、プププププ、プププププ、ププ  
プププ、

プププププ、・・・カチャ・・・でた。

「よ、ジヨーお前さんから電話なんぞ珍しいな！」

オズがいった。トレーラーにいたジヨーに電話をかけてきていた男だ。

「どこにいる、オズ！」

ジヨーが、あわてて聞きなおした。

「バローベースからビルドゥマルベースへ向かってる。

おっきなドンパチが始まったみたいだ、バローにいたせいで儲けそこなっちゃった。

今ならまだ間に合いそうなんでビルドゥマルベースに向かっちゃいるが・・・」

大型トレーラーの助手席に座りながらオズが、答えた。

「トレーラーも一緒か？」

ジヨーが聞く

「ああ、客の荷物も積んでるんでそのトレーラーで外環状線を走ってる。」

首都レジアスの外環部には8つのベースを繋ぐ環状鉄道と環状高速道路がはしっていた。

「でかした。オズ、そちらに向かう補給させる！」

オズは傭兵のプロモーター傍ら、武器の売買もしていた。

「路上でか？」オズ

「最短時間で合流できる何処かのサービスエリアで落ち合おう！」

「それと、傭兵を雇いたい、パソコンに地理コードを送る

そのポイントに一番近い、今現在フリーのソルジャーを向かわせてくれ！」

人名の救出だ！」

「あ、ははっ、」

オズが高らかに、笑った。

「スカイジヨ からおいらに依頼か！こいつは、笑っちまうぜ！」  
PDA端末をバッグの中からとりだすと、ジヨ一のデータを受信し  
検索を始めた。

「傭兵を使つてまで、助けてく奴とはいつたい何者だ？・・・」

「ロブ・キンスキン、・・・」  
かつてギディオン軍でグロリアーナの野獣と呼ばれた男だ！」

「見つけたのか・・・ついに」  
驚いたようにオズがいった。

「お前さんのよこしたデータで見つけたんだ。感謝するよ！」  
ジヨ一が答えた。

「わかったぜ、このオズ様のネットワークに期待してくんな、今すぐ  
手配してやる。

電話きるぜ！」

と電話を切ると、またすぐ何処かに掛け始めた。

「オズだ、ひさしぶりだな〜マグワ！」

墜落したヘリが幾つもの残骸となり砂丘に散らばり黒煙を上げてい  
た。

箱河豚隊の残骸であった。

一機だけ比較的原形を留めた箱河豚08の機体があった。

テールローターを？ぎ取られたその機体は墜落の衝撃で大きく変形していた。

機内では、パイロットと乗務員、アルバート、ハンス、ギル、バーキンが血だらけの状態ですでに息絶えていた。

ノーバディー・コロイドの姿はそこには無かった。

15 ウォーレン・ギルモンの憂鬱

「そう、最初は“REG”というプロセッサだった。

高速化、高機能化の研究に明け暮れていたよ。

目標に近い形にまで、仕上がったそれを、私は、“レジアス”と名づけた。

テスト運用が始まり

開発目的であるAI、人工知能とのシンクロ度合いが課題だった。

……が見事それは完成した。

当初、登載予定は、コ・モンラム建造中の

軌道エレベーターの管理コンピューターだった。

やがて、そのAIが軌道エレベーターの管理コンピューターに搭載されると

自らを“レジアス”と呼ぶようになった。

私は実験中にレジアスにシンクロしたAIに

冗談半分、もちろん、そうなればと思つてのことだが

“世界平和、争いのない世界”とプログラムした。

そのメモリーは今もAI“レジアス”どこかで働いているはずなのだが、

王となつたAIも所詮人間の操り人形

ま、結果は今の世界を見てのとおりだが、

私の名前はDr.ウォーレン・ギルモン

私はふと、“ソ・リアテック研究機構”での師と崇めるDr.サリバンの話进行出した。

その後、軌道エレベーターの管理コンピューター自体が“レジアス”と呼ばれるようになった。

今、私が携わるサテライト8計画も”マザーレジアス“が発案し実行している計画

評議取り締まり役員達はただ認可を社員（人間）達に認めさせるための道具として使われているだけにすぎない、

”マザーレジアス“はDrサリバンの実験プログラム“世界平和、争いのない世界”

を実行しようとしているのであろうか？・・・

そんなことは、すでに莫大に積み重なっていくデータの山に埋まっ  
てしまっているのだろうか？

3年前私は、“ソ・リアテック研究機構”の社員であったが  
最愛の家族を不慮の事故が襲い絶望の淵に立たされていた。

妻を失い、

一人娘は幸い一命をとりとめたが

遷延性意識障害になり重度後遺障害が残った。

睡眠導入薬として処方されることの多いゾルピデムにより昏睡状態  
から回復する試みも失敗に終わり植物状態のまま病院の中で寝たき  
りの生涯を送る事を余儀なくされた。

そんな時だった“コ・モンランム”社よりの使者が”ソ・リアテッ  
ク研究機構”の私のもとへやってきたのは、

その男は10代後半！アダムスタイプクローン人間

クローンの研究にも精通していた私には見慣れた顔であった  
何もかもに意欲を失いかけていた私であったが

彼の表情や話し方などに、安らぎを感じ、話を聞くことにした。

「サテライト計画？」と、私は彼の話しだした計画の名称にどんな  
意味があるのか訪ねた？

彼は切り出した。

「ギルモン博士、映画は見ますか？好きな映画はなんですか？」  
と聞かれた私はすぐお気に入り映画のクライマックスシーンを回想していた。

「では音楽は？好きな楽曲、歌などありますか？」

若いころ妻と聞いた歌を思い出し歌詞の一つ一つを口ずさんでしま  
いそうになった。

「どうですか？・・・あなたの記憶にくっきり残っていましたか？」  
私がつなずくと

「“マザーレジアス”はこう考えております。

コンピューターやプロセッサはどんどん進化していますし小型化が  
進んでいます。

ことレジアスCPUにおいてはその処理能力、小型軽量化は完璧と  
いっていいレベルにまで達しています。」

「頭が良いんですよ、回転力が早くて、機転が利いて、とっさの判  
断が冷静に下せる。・・・」

「しかしそれには、多くの経験も必要とします。」

「コンピュータにとって経験はハードデスクに蓄えられます。」

「ハードディスクも共に小型化がどんどん進んでおりますが、限界  
があります。

CPUが進化すればその何倍もの許容量を持ったハードディスクが  
必要になり

小型化が進んでも記憶量が増えれば増えるだけ容積が必要になっ  
てきます。



“マザーレジラス”は気づいたのです……作り続けて限界があるなら、

現存する“何か”を無限に近い許容量のあるハードディスクとして応用できないものなのか？”と

「そんな機械（ま）が作れるわけがない！」

「ええ、作ることは不可能でしょう。」

しかし、存在していました。作られたものではなく現存していたのです。……大昔から」

「もつとも、それ自体も我々の知らない“何か？”が作ったものなのかもしれません、」

少し間をおいて勿体ぶるように男は言った。

「人間の脳ですよ、……」

「我々人類の、脳細胞は究極のハードディスクなんです。」

「先ほど博士に思いだしてもらった。映画はおそらく頭の中で映像と成って浮かび上がったはず。」

俳優の声までもそのままに」

「しかし細かいところが途切れたり、ぼやけてたりしてしまう。」

「脳は映画を完ぺきに覚えているんです。しかしデータを出し入れする作業が追いついてこないだけです。」

「そもそも我々人間は都合のいい出来事と悪い出来事を区別し、自分自身で脳内にリミッターを設けて制御してしまっているのです。」

「

「わかりきってることは、もういい結局何が言いたいのだ」

「そうですね、では計画を順序を追って説明します。」

ここまでスローであった口調が急に豹変し早口へと変わった。

「CPU“新型レジアス”を搭載した超小型AIと通信端末を人間の脳内に埋め込みます。」

「AIは、人間の思考を素早く解読し、脳と連携をとって、体に命令を与える。」

「記憶を引き出したり、暗記をしたり、今まで時間がかかっていた作業を短時間で終わらせることができるようになったり同時に幾つもの情報を整理し蓄えたり出来るようになります。」

「たとえば先ほどの映画などの話を完璧に思い出すことができるようになり」

通信端末を使って外部の機器と接続、記憶内の映像をモニターに映し出したり

あるいは、直接他人の脳内のAIにそのデータを送り込むことができるようになる。」

「これが商品として実際運用されるようになれば、電話や、携帯電話、パソコン、などのツールが、必要となくなり、家電機器なども脳内からの直接の指令で動かすことができるようになります。」

「ネットワークを通じて会社側が個人の管理もしやすくなる。」

「AIの中にあらかじめプログラムを施しておくことで、犯罪などの発生を押されることもできる。」

「AIは、脳に管理されるが、脳も又AIによって管理されるようになるのです。」

「と、商品化になるにはかなりコストもかかるので遠い未来のはなしになりそうですが」

「しかし計画は開始されました。」

”マザーレジアス”の発案が、“モンラム”評議取り締まり役員達に承認されたのです。」

「私に何をしろと？」

「研究を手伝っていただきたいのです。」

「ソ・リアテック研究機構」を退社しモンラム社に籍を移してほしい

報酬は、今の倍出しましょう！」

「今の私には興味のない話だ。」

「では、興味の出るようにお話ししましょう？」

『勝手に、話している聞く耳は持たん』と・・・追い払おうとしたが、

何故か、聞き心地の良い話し方であったので、少しは気晴らしにはなるなどおもい

聞き続けることにした。

「まず8体の被験者を使います。これは発育途中の若年者8歳〜10歳位が理想とされていますが、人権的に見て、クローン人間を使う方向で動いています。」

”ソ・リアテック研究機構”は生物学やクローン技術の先端をリードしていた。

「被験者の脳内にAIと、通信端末を埋め込む、理論的には可能なことだが

これを、どう脳細胞とシンクロさせるか？が課題です。

これをあなたに主任となって引きつけてもらいたい」

「通信端末は外部接続以外にAIと脳との間を直接連絡できるように、微量な電流が発生できるようになっていて、お互いの短所を制

御しあうため体の各所に電流によって連絡できるようになってい  
す。」

「これを応用することができれば、この電流の信号によって  
体を動かすこともできるようになる。」

男の口調がとまった。

思わず聞き入ってしまった。

「たとえば、寝たきりの老人の脳をAIが、サポートし体を動か  
したり」

私の眼が男をみつめた。

「遷延性意識障害の、人間の覚醒がAIのサポートによって、可能  
になったり

覚醒まで至らなくとも、脳の指令をAIがサポートし、体を動か  
したり出来るように・・・」

私は唾を飲み込んだ

『実現すれば娘を、目覚めさせることができる。』心の中でそう叫  
んだ。

男は続けた

「クローンを8体使う予定ですが、・・・」

男はそういうと私の目を見つめてこう続けた

「検体の要望があれば本当の人間を使うことも考慮しています。」

私はその話飛び乗ってしまう。

すぐさま、その男が取り出したPAD端末に  
入力をし、オフアーを受け入れた。

男は、去り際に一言付け加えた。

「実は”マザーレジアス”は、脳の他にもう一つ人間の脳の中にあるハードディスクに

書き込みを出来るよう通信端末の改良もすすめています。」

「もう一つ?.....」

私はそれが何かな?と思ひ少し考えたがすぐにその答えがわかった。

「脳どころの話じゃない、おそらくそれ以上の.....」

「さすが博士、解釈が早い、ま、実用はほぼ不可能と言われていますが、」

男はたちあがり

「数日中に本社より連絡があると思います。そこで指示に従ってください.....」

では失礼します。.....博士とそのご家族に御幸運を!」

そついうと、部屋を出て行った。

「DNA」私は、心の中でつぶやいた。

頭の中からの指令で、DNAに書き込みができるようになる。自らが自分でその病を治せたりするようになる。

超小型化され頭の中に埋め込まれた通信機からできるような作業ではないと、私も男に同感していた。

Drサリバンの言葉を思いだした。

もしかすると、“世界平和、争いのない世界”

を“マザーレジアス”は実行しようとしているのであるか?

“コ・モンランム”のキルメス研究所でその研究を始めた私はその考えを一変させられた。

通信端末によって様々なコンピューターにアクセスできるようになったサテライト8は

“コ・モンランム”首都”レジアス”の實質上のホスト

“マザーレジアス”の、アシストが本台であった。

全ての工程を終えた、サテライト8は首都”レジアス”の周囲の8つの戦略基地に

各々完全なオペレーターとして配備されるという、

無人機、無人砲台などのコントロール

的確なサポートに、的確な提案、敏速な入力、指示業務！！

キーボードを弾くことなく全てのデータを頭の中で処理する。

初動対応が、早ければ早いだけ

戦況は明らかに大きく違ってくる。

サテライト計画は軍事拡張活動の一部であった。

ふがいながら、私は、

愛娘をサテライト計画の被検体として差し出し、今まで実験を繰り返してきた。

娘は見事体が動くようには成ったが、その瞳には何も映っておらず。記憶こそあれ、事故前の娘とはまるで別人のよう・・・いや機械仕掛けの人形のようにであった。

それは他のクローンも同じであった、培養カプセルから出たばかりの少年少女を使っているからだ。

食べることで、どんな感情も表現できず、今に至っている。

いや、他のクローンよりひどい、彼らには感情が少なからず存在しているが

娘からはひとかけらもそれを感じない、

私の手を離れると

サテライト8は、人格矯正を施され完全な軍人として”レジアス”の下僕になってしまう、

もう、これ以上愛娘アメリアを実験につき合わせるわけにはいかない、

”マザーレジアス”の見つめる“未来”に私は“錯誤”を感じていた。

Chapter 1 未来錯誤 終了

Chapter 1 未来錯誤 15 ウォーレン・ギルモンの憂鬱 (後書き)

Chapter 1 未来錯誤終り



## Chapter 2 反抗衛星 1 悪魔の迷宮

### 01 悪魔の迷宮

少年は夢を見ていた。

ルナ01少年の名前であった。

真っ白な大きな部屋で、ルナ01と08が玩具を使って遊んでいた。皆が皆、決して楽しそうには遊んでいなかった。

ルナ08だけがニコニコと積み木を積み上げはしゃいでいた。

01は、それを見つめていた。

突然、重武装をした警備員が部屋に入ってきて、

08の積み上げた積み木を崩し08の細い左腕をつかんで部屋から連れ出そうとした。

08は必死に拒み助けを01と07のメンバーに求めた。

01もそうであったが他のメンバーもただただその光景を見つめるばかりであった。

「いやだ、助けて……行きたくない」

じつとルナ08を見つめていた。

「助けて、お願い……助けて、いやだ」

「助けて、お兄ちゃん、お姉ちゃん……たすけて、みんな……」

「  
哀願するルナ08

ルナ01がつぶやいた。

「た・す・け・て・・・」

「つれていつてはいやだ・・・」

「い・や・だ」

ルナ01は目を覚ました。

「助けてお兄ちゃん」

目のさめたルナ01の頭の中でその言葉が何度も繰り返された。

「オズだ、ひさしぶりだな〜マグワ！」

突然のオズからの電話に

タピオンベース陥落により、フラックス軍との契約が破棄されフリーの立場になり

レジアスに向かおうとしていたマグワが答えた。

「ちようどいいや、オズ、フラックス軍に在籍してちゃ

やばいんで、仕事が急になくなってしまった。どこかに仕事はないかい？」

「それを、わかってて電話したんだよ、

人の捜索を頼まれてほしい、戦争じゃないが報酬は出る。」

「俺に探偵をやらせる気が？」

少し、呆れてマグワがいった。

「頼むぜ、フリーでなければできねえ仕事だし、

お前が一番、そいつに近いところを飛んでいる。な〜頼むぜ！」

オズが泣きつくようにいった。

「で、そいつを見つけてどうする?」

「救助して、スカイ・ジョーに引き渡して欲しい」

「スカイ・ジョー、……わっははははは、」

マグワはスカイ・ジョーと聞くと突然笑い出した。

「なんで笑う?」

「冗談きついで、オズ、俺はついさっきスカイ・ジョーに殺されそうに成ったんだぜ」

「そいつは確かに笑えるな、大笑いだ。笑ったついでに頼むぜ!」  
同情に乗っかるようなふりをして頼み込んだ。

「了解したよ。契約コード送ってくんな、受理する。  
あつそうだ、俺の機体はジョーにやられちまったんでな。今はガイルの機の中だ、そっちへ頼む」  
断るかのように見えて呆気なく了承した。  
マグワがコクピットのモニターを見つめた。

「わかった。じゃあ頼んだぞ!」  
というとオズは電話をきった。

「ガイル、少しより道だ、付き合うか?小遣いくらい出してやる。」  
コクピットの後席から前席を見下ろしマグワがガイルに話しかけた。  
マッドサンダーに攻撃を受け後飛行不能で不時着したマグワをガイルが救出していて

マグワはガイルの機に乗っていたのだ

「ああ、いいよ、どうせ、しばらく暇だ！」

ガイルが答えた。

“コ・モンランム” レジラス評議会議室！

「やれやれ、ギディオン軍も思い切った行動に出たものだ。

誰かがタピオンベースのパルスレーザーを消してしまったおかげで  
均衡がくずれてしまった。多大なる消耗がまた生まれてしまう。」

“コ・モンランム” 取り締まり評議長が落ち着いたトーンで話し始  
めた。

白髪でメガネをかけた。ごく普通のひ弱な老人のように見える。

「いたしかたないでしょう議長！

どの道タピオンベースは目の上のたんこぶであって、  
そのまま放置しておくわけにはいかなかった。

それにタピオンベース地下には莫大な鉱床が埋もれている。  
タピオンベースを陥落した今

なんとしてもギディオン軍からは、死守せねばなりません。」  
他の評議員が口をさした。

「ギディオン軍は北東、東、南東方面基地隊してもそれぞれ地上戦  
艦を配備してきています。」

そのためにレジラス外郭の8ベースは第一級警戒態勢にあり、それ  
以外の都市からタピオンベースに援軍を送る必要があります。」  
軍務総監が答えた。背の高いがっちりした体形である。

「他の都市からタピオンベースを死守する程の部隊を派遣すればその分その都市の軍備が手薄くなり侵略される恐れがあります。傘下協定中の他社に応援を要請してはいかがでしょうか?」  
他の評議院がアドバイスをした。

「のんきに外交などしている時間はありません、パルスレーザーを復旧させる前に

おそらく、地上戦艦は

第一警戒ライン内に侵攻してしまうでしょう。現在のタピオンベースの戦力と我々の制圧戦略軍とを、合わせても侵攻を食い止め、時間を稼ぐことは不可能に近い  
第一警戒ライン内に入られてしまえば、パルスレーザーが復旧したとてパルスレーザーの影響を受けず侵攻されてしまいます。」

しばらく俯いてモニターを見ていた議長だが  
何やらモニターに表示されると

「やむをえません、衛星軌道上よりスカイフォートレス1艦を向かわせましょう」  
と一括した。

「軌道上より降下させると、元にもどすのにも、莫大な経費がかかります。」

他の評議員がいった。

「首都レジアスの内輪ベースに通常配備させましょう、ギディオン軍も新型の地上戦艦を一度に4隻も作戦投入してきています。対抗措置としましょう」

「援軍を送るにしろ何にしろ地上戦艦との戦闘は第一警戒ライン内で行われることになりそうです。軍務総監これでよろしいですか?」  
評議長の机のモニターには”マザーレジアス”出した回答があり

評議長は、それを棒読みしてただけであった。

軍務総監は立ち上がりうなづくとそのまま席をはずし、退出していた。

「さて、次はサテライト計画の進行と承認でしたかな・・・？」

スカイフォートレス（空中要塞）全長260m全幅は500mも及び巨大な飛行戦艦であった。

おもに大気圏外衛星軌道上で建造されていた。

宇宙戦艦としても役割を果たせるレベルにまで仕上がってはいたが、脅威は宇宙空間に無く、もともと、都市防衛の緊急防御の要として軌道上から短時間で目的地にたどり着くことができた。

### 衛星軌道上

宇宙ステーション“デビルズラビリンズ”内で、緊急放送が流れた。

「緊急ミッション発令！緊急ミッション発令！

スカイフォートレス3号艦ルシファアを地上投下する。」

「目標フラックス軍タピオンベース、投下ポイント“窓”を計測中！」

管制室でオペレタ達が計算のやり取りをかわす。

“窓”とは、衛星軌道上から地上の目的地に的確に降下するための大気圏突入ポイントのことである。

「投下速度設定してください。・・・現在 - 200」  
ルシファーへデータ送信、投下速度現状維持！  
突入時 + - 0」

「“窓”確定しました。180秒後に初回遭遇します。」

「初回遭遇にて、投下を決行する」

「補助第一ガントリー解除！続いて第二第三第四解除」  
ルシファーを左右から支えていた鉄製のアームがはなれていった。  
現在メインガントリーのみ支持です。」

「投下タイミングデータ、ルシファーに転送します。」

「以後の操作はルシファー内でおねがいします。」

「こちら、ルシファーブリッジ了解した。」

「一回目の“窓”で突入する」

ルシファーのブリッジに場面が一転した。

「メインエンジン、点火せよ、」

「メインガントリー解除」

「デビルズラビリスに相対速度合わせ」

ルシファーの両翼の大型エンジンが火を吹くと同時に  
デビルズラビリスからの大きな鉄のアームが、  
ルシファーから離れたが、位置は変わらぬままエンジンの噴射が続  
けられた。

「窓”接近、離脱カウントダウン始め

50、49、48……………

……………6、7、5、4、3、2、1、

「メインエンジンフルスロットル」

ゴーと轟音をとどろかしているように噴射されたメインエンジンとともにルシファーがデビルズバビリンズから離れていく

その轟音は、空気の無い宇宙空間にはつたわらなかった。



## Chapter 2 反抗衛星 2 僕の妹

02 僕の妹

レジアス外郭南方バローベースから東南ビルドゥマルベースに向かう  
高速道路の3分の2ほど走った地点に  
そのサービスエリアはあった。

サービスエリア大型車専用駐車場

大きなトレーラーのカーゴルームの屋根部分を広げ整備機器を展開  
させて

マッドサンダーの到着を待っていたオズが、助手のジヨツシュに話  
しかけた。

「ジョーからのオーダーは全て準備できたか？」

「ウイっス、おおかた完了してますけど・・・」

「超を超える急ぎの依頼だ、請求書をいつもの2倍で作つときな！」  
オズが両の手をこすり合わせてジヨツシュにいった。

「相変わらず、がめついですね。」

ジヨツシュがそついうと同時に

「来たな！」

オズが東の空にマッドサンダーを見つけて叫んだ。

プロペラとジェットエンジンの轟音が響いてきて、  
マッドサンダーがやってきた。

マッドサンダーはオズのトレーラーの上でホバーリング状態に入ると解放されていたカーゴルーム屋根の上にゆっくりとその機体を着陸させた。

ジョーが、コクピットから降りると

「急いで装填してくれ・・・」

手際良く既に補給を開始したオズが

「からっ欠じゃねえか、30分はかかるぜ！」  
というと

「10分で頼む！」と、ジョーはごり押しした。

「そんな、無理ですよ！」ジョツシュがこたえた。

「俺も手伝う、ギャラも弾む！」

「やって見せるさ、銭がでるなら！」

オズが顔をにやつかせ答えた。

ジョーが燃料のノズルを手に取りマッドサンダーの給油口に差し込むと

オズに聞いた。

「傭兵の方は、どうだ？」

「ぬかりはねえよ、そろそろ見つけてるころじゃないか？」  
オズがのんきにそうサイドワインダーを装填しながら答えた。

時を少し戻し

テールローターの破損により体勢を保てなくなり  
ぐるぐると機体を回転させ落下していく箱河豚08

ノーバディ・コロイドは必死に機内の機器にしがみついていた。

「大丈夫！大丈夫だ！レイチエルしっかりつかまつてる！」

思わず叫んでしまったが、何が何だか分からない

やがて落下時の凄まじい衝撃が襲いかかってきて意識を何処かに吹き飛ばしてしまった。

へりの残骸の中に差し込む太陽の光がノーバディの目元を照らした。

眩しさに意識を取り戻しうつすらと目を開けてみたが、

ぼんやりと機能しなくなった電子ゴーグルのレンズに付着した埃が  
視界をさえぎっていた。

「うつ、うつうつうつ！」

ゴーグルを外すため右手に力を掛けた瞬間激痛が走る。

顔を傾け右手を見ると肩から肘にかけてへりの破壊された機材によつてはさまれていた。

右肩の奥、機材と壁面との間に隙間があり、

覗き込むと、完全に誰のものかわからなくなった血だらけの顔面が  
機材に押しつぶされていた。

この存在がなければ自分の肩から肘も同じ状態になっていたであろうことを悟ると

ノーバディは左腕で機材を少し動かし、するりとぬけだした。

しかし、肩が非常に痛む、何かによって切り裂かれたような気もするが体を動かすと、

鞭打ちに、打撲、あばらの骨折、全身から激痛が走りそこばかりを

気にしてはいられなかった。

とりあえず、墜落したヘリから脱出しなければ、・・・

『漏れ出した燃料にでも引火すればひとたまりもない、』

全身の激痛に耐えながら残骸と化したヘリの中を這いだした。

ぬるりとした感触にそこに誰かの死体があるものと認識をしあえて目を向けず

やっとの思いでヘリから抜けだした。

ヘリの残骸は爆発を起こすことはなかった。

ノーバディは、持ち合わせていたPDA端末を操作しだした辛うじて機能していたそれに

『ギデオオン軍専属A級ソルジャー、ロブ・キンスキン、SOS』とコードナンバーを打ちこみ発信をした。

砂漠の砂丘の上を右肩から流血し

左手で幹部を抑えながらヨロヨロと歩き出した。

照りつける太陽が、体力を奪っていく。

何処に向かつて歩いていくかわ分からなかった。

『作戦中の事故！！味方は近くに居るはず。』混乱した意識でそう思っていた。

そこに“コ・モンラム”の低級ソルジャー、ノーバディー・コロイドは既に居なかった。

どれだけ砂の上を歩き続けたであろう？

日が傾きかけ気温も下がり、幾分か楽にはなっていた。

だが、これから日が暮れると気温は低下し困難な環境に立たされるのは目に見えていた。

一機のヘリが、飛んできた。

ギディオオン軍の“FGTパウロ9式攻撃強襲ヘリ”であった。両翼に丸い鋼板で囲まれたメインローターついていてその角度を変えることで機動性能を高めていた。パウロヘリは上空でぴたりと止まるとゆっくりとロブのもとに降下を始めた。

マグワ達は箱河豚部隊の残骸の間にガイルのヘリを着陸させ、残骸を調べていた。

「こりゃ〜、ひど〜全員逝っちまってる。」

箱河豚08の機内を覗き込んだマグワがいった。

「助かってるわけ、ね〜ナ〜、これでは」

念のためと、認識章と、オズから送られてきたデータをガイルが照らせ合わせていた。

大きな体のわりに、細かいことが好きなようだ。

「マグワ！」

認識結果が出たのでマグワに呼びかけた。

「この、仏さまの中にはいねえよ〜・・・」

ガイルがそういうと同時に、

かすかにヘリのはばたき音がきこえてきた。

北西の方角に首を向けて見ると

ギディオオン軍のFGTパウロ9式攻撃強襲ヘリが砂丘の向こうに今まさに着陸しようとしていた。

マグワが少し小高い砂丘に駆け上り登り双眼鏡をとりだしヘリの方を覗き込んだ。

「しまった。あれじゃねえか？ノーバディーってやつは」

ヘリの着陸した地点にヨロヨロト歩くノーバディーがいた。

少し遅れて登ってきたガイルも双眼鏡をのぞいた。

「人相がデータと一致してる。間違いない」

「捕虜られやがる。一足遅かったか〜！」

マグワがガクンと砂地に膝をついた。

ガイルは突っ立ったまま双眼鏡をのぞいてパウロヘリの離陸を確認していた。

マグワが膝をついたまま天の仰ぎ

「なんか、最近ついてね〜な〜」

おのれ自身に不服を言った。

そういつて空を見つめていたマグワにガイルの双眼鏡をのぞいた顔が飛びこんできた。

双眼鏡の先は相変わらずパウロヘリを追っているようで首を右に廻し始めた。

ある位置でそれはぴたりと止まり、ガイルの口角がニヤリとひらいた。

「なんだ〜、気持ち悪い！」

マグワが少しびびっくりしていった。

双眼鏡をのぞいたままガイルが口を開いた。

「マグワ、最新型の地上戦艦だ、のってみて〜な〜あ」

「は〜、なにいつてんだ？」

慌てて身を起こしながらマグワがいった。

ガイルははるか東方に小さく見える地上戦艦の船尾を双眼鏡でのぞいた。

「あいつに、乗ってみたい」

マグワは又驚きの表情を浮かべて、ガイルと同じ方向を双眼鏡で見してみた。

「奴も、あそこに連れて行かれるよ、・・・おそろく」  
ガイルが双眼鏡をのぞきながらいった。

「あいつに乗り込めば、助けるチャンスがあるかもしれない？」

「おいおい、待てよ、どうやって乗り込もうていうんだよ。ドンパチの最中だし！」

「ギデイオン軍に雇ってもらおう！」

「なに？」

素っ頓狂な声を出してあきれってしまうマグワだったが少し考え切り出した。

「なるほどな、その手があったか、」

「そうだなあ、人助けなんて、どうでもいいことだが・・・オズの頼みもあるし、・・・スカイ・ジョーに恩を売っておけば後後、得することがあるかもしれねえ！」  
マグワは立ち上がった。

「間違いなく、女にもてるよ、それ！」

ガイルが双眼鏡から目を離すと、  
マグワの方を見てにやりと笑った。

「そうだな、ジョーに恩を売って女にもてよう！」

というと、二人でガイルの機の方に駆け出した。

なんとも安直な考えである。

日は完全に沈み

地上戦艦オージアスのブリッジでは

「日没後、見方部隊を巻き添えにする可能性がある。」

「現時点からの艦砲射撃及びミサイル攻撃は、現場のレーザー誘導にて発射しろ！」

艦長が攻撃形態の変更を告げ

「本艦は夜明けまでに、第一警戒ライン内に突入する。」  
最優先事項を告知した。

「艦長、護衛ヘリが、我が軍の識別コードでSOSを発していた。  
モンランム軍の負傷兵を捕獲しました。」

オペレーターが報告

「捕虜房に監禁しソルジャーランクをしらべろ、捕虜交換で使える  
やもしれん」

艦長が答えた。

他のオペレーターの報告

「別件ですが、無所属戦闘ヘリソルジャーが戦闘参加を求めてきて  
います。」

「いったん本艦に受け入れろ、捕虜房に収容し、同じくソルジャー  
ランク、

オフィアー履歴などを調べろ！調査終了後ミッション参加を承認する。



地上戦艦オージラスから、タピオンベースにむけ繰り返されていた艦砲射撃は少し勢いを弱めた。タピオンベース周辺では、オージラス艦載機と、モンランムのタピオンベース守備航空隊との空中戦が繰り広げられていた。

地上戦艦オージラスは日が沈み真つ暗になった森林地帯に入っていた。

大きなキャタピラーや鋼鉄の艦底部が木々をなぎ倒しゆつくりと着実に第一警戒ラインへの距離を縮めていた。

ルナ01はまた夢を見ていた。

大きな部屋で、ルナ01と08が玩具を使って遊んでいた。皆が皆、決して楽しそうには遊んでいなかった。

ルナ08だけがニコニコと積み木を積み上げはしゃいでいた。

01は、それを見つめていた。

突然、重武装をした警備員が部屋に入ってきて、

08の積み上げた積み木を崩し08の細い左腕をつかんで部屋から連れ出そうとした。

08は必死に拒み助けを01と07のメンバーに求めた。

01もそうであったが他のメンバーもただただその光景を見つめるばかりであった。

「いやだ、助けて……行きたくない」

じっとルナ08を見つめていた。

「助けて、お願い・・・助けて、いやだ」

「助けて、お兄ちゃん、お姉ちゃん・・・たすけて、みんな・・・」

「哀願するルナ08」

「どこまでかは、最近いつも見る夢であった。」

ルナ01の右肩にポンと大人の手がおかれた。

振り返ると、そこには全身真っ白なもやもやとした。大人の人間？  
が立っていた。

白い人間はルナ01に聞いた。

「お兄ちゃん助けてって云ってるよ」

「あれは、君の妹なのかい？」

ルナ01は首を横に振った。

「じゃ、君はあの子のお兄さんじゃないわけだ。」

ルナ01はうなずいた。

「じゃ、関係ないから、ほかっておこう」

「いまからあの子は、どこかに連れて行かれてひどいことをされるんだ。」

「殴られたり、蹴られたり、痛い思いをいっぱいするかもしれないし死んでしまうかもしれない」

「かわいそうだね・・・でもね、関係ないからほかっておこう・・・」

「と白い人間がいうと」

しばらく間をおいて

「い・や・だ」とルナ01はつぶやいた。

白い男がそれを聞くと

「いやだ？助けたいのかい？」

と01に問いかけた。

01は無言でうなづいた。

「君の妹ではないんだろう？ほっておきなさい」

01は首を横に振った。

「ほぐ、ほっておけないのかい・・・？」

「もう一度聞くとよ、あの子は君の妹かい？・・・」

しばらく間をおいて01はうなづいた。

「じゃ、妹を助けてあげなさい、君の大切な妹なんだから助けてあげなさい」

「じゃないと、どこかに連れて行かれひどいことをされるんだ。」

「殴られたり、蹴られたり、痛い思いをいっぱいするかもしれないし死んでしまうかもしれない」

「かわいそうだね・・・お兄ちゃんなら助けなきゃね」

01は小さくうなづいた。

そして警備員を睨み続けた。

ルナ01の目が覚めた。

「助けなきや」「小さくつぶやいた。

## Chapter 2 反抗衛星 3 飛来した悪魔

03 飛来した悪魔

「なんで俺たちがこんな所に入んなきゃならね〜んだよ!!」  
マグワが大きな声で怒鳴った。

マグワとガイルは地上戦艦オージアスの捕虜収容房に入れられていた。

「少しの間の辛抱だ、お前たちのIDを調査している」  
警備兵がそう言った。

ガイルがマグワの耳元で囁いた。

「奴も、この房の、何処かにいるんじゃないのか？」

房の窓からマグワが警備兵に問いかけた。

「よう、俺たちがこの艦に着艦するとき

一緒に着艦したヘリに怪我人がいたが、あいつはモンランムのやつか？」

この房にもいるんじゃないか!?」

マグワが嫌味を言うようにそれとなく、ノーバディの所在を探った。

「応急手当を済ましてそこに入る予定さ!」  
と右斜向かいの部屋に向けて首を振った。

「やっぱり、捕虜と同じ扱いか!

作戦参加志望者と敵兵と同じ扱いするとは、ギディオン軍のマナーも落ちたつてもんだ!」

へっ! やってらんねえぜ!」

右足で大きく壁を蹴って、不服そうな言葉を吐き捨てたが  
『締めた！ノーバディーが向かいの部屋に入るチャンスが増えた』  
と心の中でつぶやいた。

「ビュオー、ビュオオオオオー！！ビュオー、ビュオオオオオー！  
！」

突然！！艦内警報が鳴り響き

「敵艦高速接近、敵艦高速接近！」  
艦内放送が流れた。

「モンランム軍飛行戦艦接近！！！」

「総員第一級戦闘配備に付け！」

「繰り返す、モンランム飛行戦艦接近！！！」

「総員第一級戦闘配備に付け！」

「飛行戦艦？」ガイルがつぶやいた。

「ギディオンもモンランムも大きく出やがる。消耗大バーゲンとき  
たかあ〜？」

マグワが馬鹿にしたように言った。

「近隣の“コ・モンランム”軍ベースに配備されている飛行戦艦が  
こんなに早くしかも突然にここまで来れるわけがねえ！」  
とガイルがいった。

ガイルはかなりの勉強家で取得している情報量はマグワをしのいで  
いた。

「と、いうと・・・？」マグワが

「ただの飛行戦艦じゃないと・・・いうことは分かるが、そいつ  
がどうしたっていうんだい？」

とガイルに質問した。

「ああ、おそらく衛星軌道上からの特殊工作艦！  
・・・悪魔の迷宮から降りてきた。三匹の悪魔の一匹！！」  
ガイルが答えた。

「うお、、すげー怖い、でも今一、ピンとこない？」  
マグワ

「この、そつと艦やばいってことだよ！」  
ガイルがそつとマグワはゴクリと唾を呑んだ。

マッドサンダーが闇夜を高速飛行で地上戦艦オージラスに向け飛んでいた。

マグワ達はオージラスに着艦する前に、オズに暗号を送り自分達のオフアー履歴などを消去していたのである。

ジヨは、ノーバディー・コロイド（ロブ・キンスキン）がかなりの重傷状態で

オージラス艦内にいることを認識していた。

モニターに地上戦艦オージラスのデータを表示させるが最新型なゆえ、全ての情報が正確に伝わってはこなかった。

地上戦艦オージラスブリッジ

オペレーターが報告した。

「モンランム軍飛行戦艦

前方タピオンベース上空にて停止しました。」

オージアス艦長が

「到着が早すぎる。どこのベースからやってきたのか？」

「周辺の各基地からの出撃報告はわが軍の偵察隊からも報告をうけてはいません」

「艦載機を多数射出しています。」

「半数はこちら半数はタピオンベースでわが軍の攻撃部隊と交戦にはいりました。」

何人かのオペレーターの声が飛び交った。

「飛行戦艦よりミサイル接近！多数です。」

艦長があわてて指示を出す。

「本艦も飛行戦艦に向けミサイルを発射しろ！」

ミサイル迎撃用多弾頭ミサイル発射！対空銃座掃射、

上部甲板主力砲座、1～6番全砲門、飛行戦艦に照準合わせ！」

流線型の甲板上からせり上がったミサイル砲座が次々とミサイルを発射させていった。

単針の50インチ主力砲座が、照準合わせのため細かい動作を繰り返した。

「1～6番砲座飛行戦艦に照準ロック完了！」

艦長が指示を発した。

「砲撃！うちまくれ！」

ドンドンと大きな音を立てて主力砲座が発砲される！

先に発射された迎撃用のタピオンベース弾頭ミサイルが目的地点で弾頭を細かく散開させた。



飛行戦艦から放たれたミサイルはことごとくその散弾に撃墜され  
闇夜に無数の丸い爆発が起こった。

「西方配備中の地上戦艦隊は状況は？」

艦長がオペレーターに訪ねた。

「にらみ合いの状態が続いており、大きな動きはないようです。」

「一隻を此方に応援に向かわせる！艦載機を先行で応援に来させる  
んだ。」

「砲弾幕、敵艦正面で消滅、

近距離用の音波シールド弾で消滅させてる模様です。」

艦長が叫んだ。

「砲撃を繰り返せ、隙をねえ、なければ作るんだ。」

「全砲門で対応しろ！」

すうっと、艦長の脇に一人の男が立ち艦長の耳元でささやいた。

「なに？グロリアーナの野獣だと、・・・」

・・・特Aソルジャー、ロブ・キンスキン！」

艦長が驚いたように振り返った。

「間違いありません！」

「3、4年前に消息を絶っていたはずでは？

参謀長！」

参謀長と呼ばれた男が続けた。

「記憶障害を起こしているようで、モランム軍の低レベルソルジャーとして作戦行動をしていたようです。」

「そうか、では、やはり捕虜ということになるな！」

「しかし今現在は、その記憶も失っているようでして、グローリアーナの攻防の作戦直前だと、本人は思い込んでおります。」

「治療が必要か？」

艦長が少し気の毒に思いそうだった。

参謀長がうつむいていた顔を上げ艦長をみつめていった。

「今の記憶状態のまま本作戦に、導入できないかと……？」

艦長は振り向き本気か？といった表情で参謀長を見据えた。

「たとえば、グローリアーナの野獣の動員された白兵戦であればパルスレーザーコントロール施設を無傷で制圧することなど容易いのではないかと、」

艦長の顔色が変わった。

「可能なのか？負傷しているとも聞いている。」

「治療は完了しています。軽傷とは言えませんが、薬が効いて落ちて着いています。」

もう少し、薬で散らすことも可能ですし……」

「目の前の飛行戦艦を相手に直接攻略は時間がかかるかと、」

ちょうど良く、運び屋をやってくれそうな輩も現れましたし、失敗してもリスクは陸戦部隊一個小隊程度です。」

「もちろん、成功してくれることを望んでいますか・・・」

「どうせ、最初から無かった駒という訳か、」

艦長がそういうと

「オペレーター、先ほどのフリーソルジャー二名にオフアーだ、強制エントリーさせる！」

## Chapter 2 反抗衛星 4 アビリティ

### 04 アビリティ

ルナ01はベッドに横たわり  
天井を眺めていた。

妹を助けなければという思いがどんどん強くなってきていた。  
眠れない、……

気になってしょうがないのだ  
現実では見せたことのないルナ08の笑顔が、夢の中では、はつきり  
とみえていたのである。

今、ルナ08はひどい仕打ちを受けているのではないだろうか？  
そんなことで、頭がいっぱいになっていた。

ふつと目を閉じた。  
すると何か細い管の中を高速で動きまわっているような光景が浮か  
んだ。

次の瞬間閉じた瞳の中で映像が映し出された。

表面にエンボスを施したプラスチックで内装してある部屋が映し出  
された

自分の寝ている部屋とまったく同じづくりの部屋であった。

真っ白なプラスチックの天井壁床

入口の扉と反対側の壁にモニターがしまわれていて、

真っ白なシートでつつまれたベッドが一つ

何のために使うかわからない机と、椅子

その椅子に、どこを見るともなく焦点の定まらない目をして、自分と同じ服装をしたルナ08が座っていた。

はっと、驚き目をあけた。

はつきりと見えたのだ。

目を開けた今でもそれは見え続けている。

ルナ08は、今は虐待されていない、と安心すると

その光景は頭の中から消えていった。

もう一度目を閉じた。閉じる必要はないんだろうと納得はしていたがそれでも目を閉じてみることにした。

ルナ08がいた部屋とまったく同じづくりの部屋が映し出された。

しかし椅子にはだれも座っていないかった。

その代わりベッドに少年が横たわっていた。

ルナ01は何となく右手を天井に向かってあげてみた。

すると頭の中に映し出された。ベッドに寝ている少年も同じように右手を挙げた。

> i 3 8 2 5 7 — 4 0 9 9 <

左右に腕を振ってみた。映像の中の少年も左右に腕を振った。

僕が僕を見ている。そう思った。

目を開きおそらくそこから見ているであろう方角を見つめた。

半円形のドームで囲まれたカメラがその天井にとりつけられていた。

カメラを見つめる。頭の中の映像の自分はこちらをじっと見ていた。僕だけじゃない、誰かが僕たちの映像を見ている。

ルナ02と07の部屋も全部見ることができた。

しかもそれは各々部屋4方向から、

どこで見ているのか気になった。細い管の中を高速で動きまわって何かしら導かれる方向に向かっていった。

8つの部屋をそれぞれ4つの角度から映し出している。大きなモニタールームが映った。

Drギルモン、と助手達がいた部屋だ

今は、助手のレベッカ一人だけがコーヒーを飲みながらモニター内のルナ01と08を見張っていた。

ルナ01はその光景に何故か憤りを感じた。

少しして8つの部屋を映し出す32のモニターが一斉に全部消えた。なにも映らなくなったのである。

大慌てし右応左応するレベッカを

ルナ01は頭の中に映し出された映像で見ていた。

少しにやりと微笑むと

ルナ01は眠りに就いた。

Drウオーレン・ギルモンの部屋の電話が鳴った。  
レベッカからであった。

「Dr、サテライト8の部屋を監視するモニターが突然消え  
復旧ができません、今エンジニアを呼んでいます。HDDにも空白  
ができそうです・・・」

その音声は寝ていたギルモンをたたき起した。

ギルモンは起き上がりTV電話モニターに向かうと

「わかった、着替えてからすぐ行く」

というと、電話をきった。

Drウオーレン・ギルモンは

『いよいよ動き出したか、

・・・』

心の中でそうつぶやいた。

ガイルのズングリとした大型のヘリ“バルファウムMHS-78式  
重爆撃ヘリトンベリ”の下部ガントリアームに

ギディオン軍専用仕様変更された“NXインダストリーのトータ  
スNXR-2085改”

がドッキングしていた。

地上戦艦オージラスの中空滑走路から、今まさに出撃しようとして  
いた。

トンベリの後部座席にて

「厄介な、ことになりやがったなあ、近づきすぎるくらい近づけた  
っていうのによー!」

マグワが頭を抱えた。

「ノーバディーコロイドは怪我もしている。どうしてこんなことに？」

前席でガイルが機器を調整しながら呟いた。

「ブリッジより、トンベリビーストへ」  
無線が入った。

「ダサイ、コードネームつけやがって、ちくしょ〜!!」マグワが愚痴った。

「作戦コードを送信する。指示に従え！」

「トンベリビースト了解した。コード受信完了！発進する。」  
ノーバディーが、いやロブ・キンスキンがそう答へ

「ビーストよりトンベリへ、タッチダウンポイントまでのコントロールはこちらで行う！」  
続けてガイル達にも指示をした。

「うげ、まじかよ、・・・ピンピンしてやがる。おめ〜はいつたい何者なんだ〜？」

ガイルが質問したが、ロブはそれを無視した。

トンベリがトータスからの操作で起動したメインローターが廻り始め機体を浮かすことはなかったが、滑走路を走りだした。

ふらふらと滑走路を走行し、浮力のないままトンベリは滑走路からとび出した。

「ばか、ばか、ばか、やめろ〜」



マグワが叫んだ！  
トンベリは滑走路からとび出すと急降下し始めた。

「ああああ、重いんだよ〜こいつは〜、出力も上げずにいきなり滑走路から外れたら落ちるに決まってるだろ〜」  
マグワがまた叫んだ

ガイルも驚きながら、  
「おっ、おち、おちる〜」と叫んだが

機首を少し上に向けるとふわっとトンベリは安定飛行に入った。  
ロブは逆に落下の加速を利用して機体を立て直し安定させたのだ。  
そして、雨あられのように降ってくるミサイルやら弾丸やらをよけながら  
森林すれすれまで高度を落としパルスレーザーのコントロール施設  
に向かった。

「何者なんだ？こいつ・・・」  
マグワがトンベリの後部座席でひっくり返った状態でうなった。

## Chapter 2 反抗衛星 5 悪魔の縄張り

### 05 悪魔の縄張り

「アーサーリーダーよりビューバロックブリッジへ」

「ソ・リアテック77式BHVT-01戦闘ヘリマッドサンダーを補足した。」

「タピオンベース方面に向かっている模様！」

「ビューバロックブリッジより、アーサー隊へ追尾撃墜しろ」

「了解、アーサー隊全機にて、追撃に当たり攻撃する。」

地上戦艦オージアスの応援に向かう地上戦艦ビューバロックの艦載機バルファウムAV-31垂直離着陸機VTOLチェンバー10機によつて

アーサー隊は編成されていた。

猛スピードで飛行していたマッドサンダーであったが、すぐに彼らに後ろをとられてしまった。

「相手をする時間が無いんだよ！」

マッドサンダーのコクピットの中でジョーが唸った。

最接近したチェンバーよりホーミングミサイルが放たれた。

マッドサンダーは直前までミサイルを引きつけ

機体をくるとローリングさせ、間一髪でこれを交わすと、追い越したホーミングミサイルをバルカン砲で撃墜した。

「さすが、スカイ・ジョーやるではないか」

とアーサーリーダー

また、3機がぴたりとマッドサンダーのけつに食いついた。

マッドサンダーは、後部錯乱ブイ発射口から、何かを射出したやがてそれは細かく砂のように広がり

真後ろに付けていたチェンバー3機のジェットエンジンの吸気口に入り込むと、エンジンから火炎を吹き出し

チェンバー3機は黒煙を上げ墜落していった。

「磁気砂?!」

アーサー隊は少し距離を置き残りの全機からホーミングミサイルを発射したが

マッドサンダーは間一髪のところまで次々とかわしバルカン砲でミサイルを撃墜した。

「くそ、なんてやつだ……」

アーサーリーダーがうなった。

マッドサンダーは、チェンバー7機を引き連れ攻撃をかわしながら、速度を変えず

地上戦艦オージアスにむかった。

飛行戦艦ルシファアのブリッジ

「タピオンベース上空のギディオン軍侵攻隊はほぼ制圧しました。」

司令官が答える

「残すは第一警戒ライン手前の地上戦艦オージラスと、周辺の航空部隊！」

「陸戦部隊も多数オージラスより出撃している模様です。

オージラス後方より、地上戦艦ビューバロック接近。」

「対地銃座準備します。」

「オージラス本艦主砲の最大効果距離に入りました。」

「ラウンドモバイル隊、パワードスーツ隊射出しろ！」

「奴等は足が遅い、オージラス、ビューバロックを個別にたたく」

「主砲発射用意！目標地上戦艦オージラス前方」

司令官が立て続けに指示を出した。

ルシファアの両翼から伸びた大口径の方針が稼働しだすと一点をとらえぴたりと止まった。

「主砲標準ロック完了！！」

「発射！」

司令官の一声とともに、両翼の砲身から砲弾が一揆に放たれた。

「モンランム飛行戦艦が、主砲を発射しました。」

オージラスのオペレーターがあわてて叫んだ。

「何！面舵全速回避、多少の無理はかまわん速度を上げる！」

艦長があわてて指示をした。

砲弾は少し左前方に着弾し木々と土砂を吹き飛ばした。

ルシファー艦内

「オージラス面舵回避しました。」

「ひるみおつたな、思いつつぼだ、無様に腹をされけだしたな、」

「主砲オージラス左側面に集中砲火を浴びせろ！」

ルシファー司令官が不敵に笑いながら指示を下した。

ドンドンと大きな音を立てて主砲が連続で発射される。

オージラスオペレーターがあわてて報告した。

「直撃、来ます!!!」

ズドーン大きな音を立てて一発がオージラスの左舷に命中し爆発した。

「取舵！体勢を立て直し、全速後進しろ敵艦射程外に離脱する。

被害状況を報告しろ!!!」

「補給の完了した航空部隊は随時発進、近距離から飛行戦艦にミサイルをたたきこめ！」

艦長が叫んだ。

木々と土砂を掻き揚げ、オージラスが大きく後進を始めた。

ルシファーの司令官が叫んだ。

「オージアスを主砲の最大効果圏内に捉えたまま追撃する。微速前進！！」

飛行戦艦の移動速度は地上戦艦の移動速度をはるかに上回っているのはいうまでもない、

ルシファーが移動を開始するとその間の距離はすぐ縮まり、ルシファーの主砲の最大効果圏内に捉え発砲を繰り返した

「艦長！だめです。追撃してきています。引き離せれません。」  
オペレーターが艦長に指示を仰いだ。

「我が艦の主砲と比べると破壊力の桁が違いすぎる直撃が繰り返されれば致命傷になる。」

艦長が呻いた。

ゴーっと大きく艦内が揺れた。

「艦首甲板に着弾、1〜3番ミサイル射出口損傷！」

「距離縮んでます。速度が違いすぎます。逃げきれません！」

補給を済ましたバルファウムAV-31垂直離着陸機VTOLチエンバーの機体が被弾し続けるオージアスから離陸すると一気に高度をあげた。

上空から振り返りオージアスを見降ろすと、流線型をした甲板上を容赦なくルシファーの主砲砲弾が襲っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6587w/>

---

SKY-JOE story

2012年1月4日07時49分発行